

石川雅望年譜稿（六）

— 文化二年より文化八年まで —

本稿は「文化元年の石川雅望」（高知大学教育学部研究報告第三十一号・昭和五十四年八月）につづくものである。雅望にとって文化初年は、国学者、狂歌師、読本作家として文芸界に再登場し、その地位を不動なものにしていった時期であった。

文化二年乙丑（一八〇五） 五十三歳

○一月十二日、南畝、赴任先の長崎よりの書簡で、雅望の近況にふれる。

▲（前略）五老子は快復会日にも被参候由能々御伝言可被下候（後略）

正月十二日

直 二 郎

定 吉 殿

（『蜀山人全集』二）

□昨年も雅望の病気を桑名宿で聞き、息子の定吉にその安否を書簡の中で氣遣っているが、弟子を思ふ南畝の心情が良く表わされている。この書簡によると体調も快復しつつあり、種々の会にも参加しているようである。

○六月九日ごろか、痢病を病む。

▲御手書奉「拜誦」候、秋暑甚敷御座候へ共御安全被「成」御座「奉」察喜候。小子先月九日より痢病をやみ候て（後略）（清水浜臣宛、七月十二日付書簡「清石問答」）。

□清水浜臣への書簡であるが、文面からすると、まだ前年の関西旅行

粕 谷 宏 紀

（教育学部国文学研究室）

での無理が残っており、消化器系統の疾患に悩まされているようである。

○六月十七日、清水浜臣より書簡。

▲（前略）さるはひと日、勇雄にことづてせさせてのたまひおこせたりし紫の物語の中なる字音の語ども、これかれ考得給ひしことのあるを、一つふたつ書出して、いかで浜臣がおもひえたることもあらば、こころみにへだてなくきこえまゐらせよとのたまひおこせたまふよ（後略）

みなつきついたちなぬかの日

清 水 浜 臣

石川の君にきこえまゐる

（『清石問答』）

□五月ごろか、雅望が清水浜臣に『源氏物語』中の「けいめい」「けうさう」「いかう」「ふてふ」の字音について意見を求めたのに対して、浜臣からの返書である。

雅望は寛政三年の事件以来、以前のように狂歌界には、積極的な態度をしめさず、もっぱら古典文学—とくに源氏物語—の研究に没頭していたのである。『湖月抄』を読むための手引書ともいうべき『源註餘滴』は、寛政末年ごろから起稿しており、世に「源氏癖」の飯盛と

喧伝されていた。そして源氏物語の講義をおこない、その講筈には鹿都部真顔や柳亭種彦も連なつたという(野崎左文『六樹園飯盛の伝』(二)・井狩章氏『柳亭種彦』人物叢書17)。

雅望を浜臣に紹介したのは、大田南畝であつたようで、中村秋香は「鶯のなくねを野ちのしるへにてしらぬかき根の梅を見るかな」といふ歌は南畝とうちつれて、上野に遊びしかへるさ、ゆくりなく泊酒舎をとひて、はじめて浜臣にあへりし時の詠なりとぞ(『秋香歌かたり』明治四十年刊)と記している。丸山季夫氏の『泊酒舎年譜』には、この間の事情を語る記事や、大田南畝に関する資料にも見当たらないが、考えられる事柄ではある。当時浜臣は上野不忍池畔に居を構え、泊酒舎と号していた。

さて、前記浜臣の書簡に見える「勇雄」という人物であるが、雅望と浜臣の間の連絡を受け持っており、『清石問答』にも「(雅望からの)をりをりの御せうそこよし田勇雄よりつたへうけたまはり侍りぬ」と出てくる「吉田勇雄」である。彼は浜臣とは関係があり、とくに雅望とは浜臣との交流から親しくなつていったとみえ、雅望没後、子息清澄が建てた墓碣銘を撰書した人物であつた。

ところで私はこの人物について、いかなる者か永く不明であつたが、はからず丸山季夫氏の『泊酒舎年譜』を読んでいて、その中に関連記事を発見した。私は怠っていて、丸山氏の御調査以上のことをしていないので、とりあえず『泊酒舎年譜』より該当箇所を引用することにする。

。一月十二日杉田の梅を見んとて家を出で、雅人よしあしの翁、川崎駅の田中兵庫、池上太郎右衛門等を訪ひて、十五日酉時(午後六時)家に帰る(中略)。池上太郎右衛門幸仲は伊沢左次重成の四男。幸豊に養はれ、与楽亭三世の名跡を継ぎ、池上新田大嶋村新組の名主、嘉永六年三月三十日歿。年七十八。浜臣は其の親族吉田勇

雄の手紙を托され、返事を得て辞す(後略)(文化四年の条)。

丸山氏が吉田勇雄にふれているのは、右のわずかな記事であるが、文人たちと交流のあつた地方名士の池上太郎右衛門の縁戚であるとする、浜臣とは長く交流があつたこととはうなずけるし、浜臣を通して雅望とも交渉があつたことは自然の成り行きであつたろう。なお「吉田勇雄」については後考を俟ちたい。

○七月上旬ごろ、骨節疼痛甚しく臥す。また手がふるえ筆を執ることができず、そのうえ息切れもする状態になる。

▲(前略) 当月上旬又々疝積に相かはり骨節疼痛いまだ平臥罷在候。其故に御返書も不奉呈大に背本意候御容恕可被下候(中略) 病中強て筆を取申候誠に手ふるへ候て、さらにうごき不申、そのうへ

息切れして机にむかひがたきやうにおぼえ候えども忍びつつ認め御覽に入候。定て見にくきことどもに候はんと存候(『清石問答』)。

□痢病にかわつて、胸腹部が痛み、かつ関節が痛むといふことであるが、身体がまだ本調子になつていないことを表わしている。

○七月十二日、清水浜臣に書簡。

▲(前略) 病中手ふるへ候て、おもふこと十が一も書とりかね候。猶快気の上可申述べ候。御覽之上丙丁に御投可被下候以上

七月十二日

雅望 拜

清水の君

(『清石問答』)

□六月十七日の浜臣からの書簡に対する返書で、前記『源氏物語』中の語句についての、さらに詳細な考証をしたためている。

○七月二十三日、清水浜臣より再度書簡。

▲此程はいとこまやかなる御せうそこよまた待つけれぬ。はつきりよりも珍らしう、はたうれしう、すなはちくりかへしはべりぬ。まづ聞えさすべきは、水無月のついたち頃より御心ちそこなひたまひて、今は

ども猶うちふしがちにておはすとか、よそながらおぼつかなくおもひきこゆるをこころしてよくもつくろはせたまへや（後略）

ふづきはつか三日

浜臣

石川ぬしの御もとに

ふたたびきこえまゐる

〔清石問答〕

□雅望の体調は、相変わらずすぐれず、浜臣の雅望に対してのこまやかな氣遣いがよく表わされている。書簡はこのあと、前記『源氏物語』中の語句の字音についての考察が詳細に記されている。

〔補記〕雅望と浜臣との連絡に当たった「吉田勇雄」の縁戚「池上太郎右衛門」についてさらに資料を得たので記しておく。目新しい事ではないが、必要があつて大田南畝の『調布日記』を読んでいたところ、つぎのような記述があつた。

（前略）それより大師河原村なる池上太郎右衛門が家にいたる、此名主もとは小田原北条の臣下にて、小田原落城の後、池上村におりし故池上氏となれり、此所にうつりても年久しと云、水鳥記にみえし底深の子孫にして、家に蜂龍の盃といふをつたふ（後略）（『調布日記』巻下）。

この時、南畝は文化五年の暮に玉川治水視察の命をうけ、十二月十六日小石川の家を出て、是政村で迎年、玉川上水の取入れ口である羽村（東京都西多摩郡羽村町）まで到り、ふたたび多摩川を河口まで下っていた。巡視を終つて家に帰つたのは四月三日であつた。池上家を訪ねたのは三月十日で、同家で見つた「蜂龍の盃」を詠じた短冊が、今も伝えられている。それには「池上の家につたふる蜂龍の盃をみるに庭に牡丹の花さかりなり 蜂龍の盃よりてさしむかふにはにも花の底ふかみ草 蜀山」と南畝筆で記されている（浜田義一郎先生『大田南畝』二〇七頁）。池上家は名主であつて、江戸の文人たちと交流があつた趣

味人であつたようである。

○読本『しみのすみか物語』（上下二冊）を刊行する。

▲刊記を家蔵本によつて記すと、

文化第二乙丑春開彫

大坂唐物町

河内屋 太助

江戸山下町

書肆 萬屋太次右衛門

尾府玉屋町

永楽屋東四郎梓

とある。序文は大村周斎と雅望自序。跋文は名古屋の朝田保清である。挿画は司馬級で、全部で十一画（上下、下六）描いている（なお本書は天保十年に須原屋茂兵衛、岡田屋嘉七より再版されている）。

□本書の成立は、周斎（大村詡、字徳先号越南原州川越人今藉于東都一天明二年刊、藻雅堂須原屋嘉助編『大東詩集』中の「詩人姓名」による）の序文によると「享和二年」に草稿が成り、構想はそれより十数年前に立てられたという。それについて雅望も自序で、

わかき時、雨ふりあるはつれづれなる頃、旅人のあつまりて、さまざまの物語せるをききて、その中わらはしきかぎりえりひろひて、まんなもてかきつづりて見しが、これは文字のすゑ處もおぼしくあやしければ、人にも見せでうちこめ置ぬるを、このごろほうごの中よりみいだしつるに、しみといふむしぞとこゝろえてすみはびこりたる。女子なるものこれかんなに書てたまひなむといふを、をりふしあつけになやみてもこよひをりければ、さらばとて筆すさみとはなしつ。すべてはもとのままなる中に、少々はにはかにつくりまうけてそへたる事もあり（後略）。

と記しているが、これは文飾もあり、もとより全部信用しがたい面もあるが、おおよその事情は伝えていると思う。

本書には民間に流布する五十四の笑話を、『宇治拾遺物語』に擬した雅文体に焼き直し、時代を上代に置いている。そして借物のような人名をわざわざ付すという細工をほどこしている。文体を『宇治拾遺物語』に倣ったことは、大村周斎の序文に「其志將_レ繼_二芳躅_一於宇治並相_二とあることでも明らかである。

素材は岡白駒の『訳準開口新語』（宝暦元年刊）や中国の笑話集『笑府』『笑林広記』、また木室卯雲の『話鹿子餅』、小松百亀の『聞上手』といったように、日本、中国の笑話類から得ている。『しみのすみか物語』論は、別の機会にゆずるが、素材を日本・中国の笑話から得たことは、狂歌作者として、黄表紙作者として、また中国文学の読解力を持つ雅望としては当然のことであったと思われる。しかし、内容は雅望の創作というところまでは消化されていない。これは序文で「これは文字のする處もおぼしくあやしければ、人にも見せでうちこめ置ぬる」と、はからずもその心情を吐露していることと無関係ではない。またこの小説の一面をいい表わしていると思うのが、東壁堂（永楽屋）の目録に「此書は当世のおもしろくおかしき俗談のうちにて、尤興あるをゑらみて、其文雅は宇治拾遺物語の雅文によりて絵入となし、初学作文の助となる面白き書なり」と紹介されていることである。つまり初心者のための和文を作る際の手本ということである。これは書肆の広告とはいえ、雅望の和文家としての自負がうかがえるかと思われる。雅望はこの物語を契機に、擬古文による表現を本領として、素材を好んで鄙俗のものに求め、滑稽味を出すという作品を生み出していくのである。

本書の出版経緯は、跋文に「此書五老石川子所_レ著也。余嘗在_二東都_一時借_二鈔某家_一。頃日書肆東壁堂乞_レ上_二梓_一之。乃校正以與_レ之。甲

子孟春 尾張 朝田保清識」とあるように、江戸滞在中雅望と親交を結んだと思われる朝田保清が、東壁堂に出版の話を持ち込んだものであろう。東壁堂とは、文化元年の関西旅行で知己を得ている。また江戸での売捌所に「萬屋太次右衛門」が加わっているのは、一時、狂歌師を志した式亭三馬の婿養子先きであった事と関係あろう。ちなみに「萬屋」は、文化三年に『狂歌艦』後編（初編は享和三年刊）および後集を刊行している（永楽屋も書肆の一員として名を列ねている）。なお内閣文庫に自筆稿本があるが、同書に「朝田家藏書」（岸本由豆流の蔵書印）の印記があるので、朝田の跋文は文飾がないことがわかる。

○この年『清石問答』成る。
□雅望と清水浜臣との間に交わされた、『源氏物語』中の語句についての問答を記した書で、雅望の古典に対する学識がよく表わされている。

浜臣は当時二十九歳の若さで、雅望とは親子ほどの年令の差があるが、雅望は浜臣に対して驕ることなく「誠に御文章と申御学問の深遠なる事実に感服仕候。老朽など一言を聞え奉るべき道理無_レ之奉_二恐入_一候事どもにて候」と尊敬の念を抱いている。

この研究がやがて『源註餘滴』『雅言集覧』へと結実するのである。なお古典語句に関して詳細な研究が『蛾術斎叢筆』（上下）の題で、津村涼庵の『片玉集』巻三十四（書陵部蔵）に収載されているが、内容は『ねざめのすさび』（刊年不明）と重複するところが多い。

なお『清石問答』は写本として伝わり、正確な成立年時は不明であるが、確證がないまま本年にまとめられたとした。

文化三年丙寅（一八〇六） 五十四歳

○早春、大田南畝隠棲先の成子村に雅望を訪ねる。

▲早春將訪石川子相干成子村会雪後溼澁及大関而還悵然成詠

駅舎綿連送馬蹄。路融餘雪没深泥。
春來未著登山履。咫尺無由訪隱棲。

〔杏園詩集〕卷之二

□右は昭和三十七年十二月に、日本大学総合図書館に蔵せられた、大田南畝の詩集『南畝集』十六に収められているものである。この詩集は、南畝や彼をめぐる文人たちの動向を伝えている貴重な資料となっている。購入された当時、私は日本大学の図書館に通って、必要箇所を抄写した思い出があるが、此度大澤美夫氏によって、近世文芸資料シリーズの一つとして古典文庫より刊行され、研究者が容易に利用できるようになったことは喜ばしいことである。

さて、右の七絶によって、雅望が寛政三年江戸払い以後、いまだ郊外成子村より江戸府内に移っていないことの証として、貴重な資料といえよう。

○この年の三月ごろか、雅望、小石川金剛寺坂の南畝の新居（遷喬楼）を訪問するか。

▲鶯谷のさくらえ

厠ほどなる家居の所せはきに、たれこめてくらしわびぬるを、思ひかけず鶯谷よりとて御せうそあり、ひらき見れば、四谷の馬に鞍おけとのみあり、うれしくてそぞろに出たちてゆく、みちいとほらかなれば、かのうばそくの宮がりゆき給ひし、かほる大将のむかしもかくやなどおもふ、ひきことさへいとこちつけがましや、参りつきて、はひりの方をのぞけば、とのゐ人めく翁の、ひなたに股うちひろげて、きんかきならしむたるぞ、かの宮のさまにはかよひたる、廊めくかたをのぼりゆけば、えならぬ匂ひの、さとかほりくるを、おのが追風にやと、鼻うごめかすに、さにはあらで、勾欄のまへなる桜の咲みだれたるが、けふのみなみにややちりそむるなりけり、あるじの御かたはらにうちそばみて、長崎みやげの鏡とりあげて、これしても月の水ハと

るべかりけりといふハ、中の君にはあらぬ、中戸屋のばッアなるべし、さてさまざまの人々入くる中に、横川の僧都の妹君、源内侍だつさだ過人も見ゆめれば、艶なるはたちのわかうどの、うちまじるべきこちもせざれば、あなたさまにゐさりよりて、すももの下の道せばみとうちずしぬる、しりめさへこと人に似せず、うぬぼとハみゆめり、かねて契り物し給ひし人々の、ぶんながしてまうこぬもあれば、やみ雲にはらたせ給ふも、げにことわりなる梢の花のさまなり、あるじの君料紙とり出て、難波津でも常磐津でもと、上調子にてせめ給、さてはいかにせん、かかる桜のもとに立て、やたてのちび筆とり出んハ、便なき備後の三郎めきて、かくれみの笠ほしくあれど、天香煎をむなくせぬ、上野の山におとらざる、さくららの花のかはつるみに、人のめつらを忍びつつ、ただあてがきにかきさしてやみぬ、（『狂文吾嬬那万厘』）。

□右の『源氏物語』中の人物まで登場する狂文が、小石川金剛寺坂の南畝の新居遷喬楼を訪問した際の文章ということは明らかである（前後するが、雅望がはじめて遷喬楼を訪れたのは文化元年三月二日であった。このことについては、本稿の末尾の補遺に記したので、ここではふれないことにする）。なお南畝のこの新居については『蜀山人の研究』（玉林晴朗）や『大田南畝』（浜田先生）に詳述されている。

この文章は本年三月としたことについての証は薄弱であるが、文中「長崎土産の鏡」とあるところから推定したのである。すなわち、南畝が長崎奉行詰を命ぜられたのが文化元年六月十八日で、七月二十五日出発、文化二年十一月十九日江戸に帰着している。したがって「長崎土産云々」は、当然江戸帰着後でなければならぬ。雅望が南畝を三月ごろ訪問したしたのは、文化元・三・五・七・八年のいずれかであろうが、前記したように、「長崎土産云々」や久しぶりに南畝に会える喜びを表わした雅望の文章から、遷喬楼訪問を本年としたい。

※四月一日、雅望の漢学の師と伝えられる古屋昔陽没す。享年七十三歳。

□拙稿「石川雅望年譜稿(一)」参照。

※五月十六日、雅望の和学の師と伝えられる津村漆庵没す。享年七十一歳。

□拙稿「石川雅望年譜稿(一)」参照。

○七月、鹿部部真顔より『蜻蛉日記』を借りて校合する。

▲七月石川雅望北川氏蔵本を借りて、蜻蛉日記校正を了す(静嘉堂色川三中移写本、学習院蔵上田秋成手識本を写せしもの、北川氏は真顔なるべし)。(丸山季夫氏「泊泊舎年譜」)。

□雅望が校合した『蜻蛉日記』は、丸山氏によれば、現在静嘉堂文庫蔵の「色川三中移写本」で、この書は学習院大学蔵の「上田秋成手識本」を写したものであるという。この「上田秋成手識本」について、高田衛氏は著書『上田秋成年譜考説』の享和二年十月の条で、つぎのようにのべられている。

十月、契沖本『かげらふ日記』の書写が完成する。

学習院図書館蔵『かげらふ日記』下巻本文の末に、蜻蛉日記三巻高津阿闍梨真跡也。師名契沖本國尼崎人姓下河父元全 歳七十一為僧晚住高津田珠庵 而此書尤不得読。今以師之所写書其知八九猶所未審者俟後賢之訂正已 享和二年冬十月 上田秋成録

(中略)この秋成本は、四年後の文化三年には、狂歌師北川真顔の手に移っているとの説がある。(川口久雄氏「かげらふ日記写本考」『國語』昭十三・一月)。色川三中書入の板本の奥(静嘉堂文庫蔵)に、秋成の跋文がそのまま写されて、さらに「文化三年七月借北川氏蔵本校正之」とあるのを根拠とするらしい。

右の高田氏が記されている「文化三年七月云々」の識語は、色川三中の筆になるものと誤解されやすいが、そうではなく、静嘉堂文庫に長

く籍を置かれた丸山氏の記事のように、秋成本を転写した「色川三中書入本」が真顔の所蔵になり、それを雅望が校合したのである。「文化三年七月云々」は雅望の識語である。

雅望は、ますます古典考究の道へ深く入りこんでいったようである。校合という基本作業が、やがて『雅言集覧』『源註餘滴』といった研究書を生み出す原動力となっていくのである。

○八月十五日、近藤重蔵の寓居にて、南畝らと観月の宴。

▲(前略)当年中秋は二年ぶりにて東都之月を見候故歟十三より十八九迄所々宴会有之詩歌も出放題ニ夥敷出来いたし候(中略)十五夜本所中之郷大沢右京兆之別荘ニ近藤重蔵正斎寓居 庭の広き事二三町余 一町余の池あり蓮葉生ひしげれり 池中に四河あり是又唐蛩の器物ニ蝦夷雜り 客ハ前方より触置候御出席之面々

京伝 馬琴 焉馬 飯盛 馬蘭亭 唐画人芙蓉ノ臣 柳橋歌妓お増 大橋歌妓 義太夫ふし手妻遣も有之 中村勘三郎座へ出候うたひ等来

(後略)

長月七日燈下書

蜀山人(花押)

諏訪の祭ハあさつてといふ日也

如 登子 几下

(浜田義一郎先生「蜀山人大田南畝書簡(上)」『大妻女子大学文学部紀要』第六号・昭和四十九年三月)

□右書簡は、文化三年九月七日付の桃李園紀軽人宛であるが、南畝は十三夜から二十夜まで連夜宴会を催している(同書簡)。雅望が参加した十三夜には、南畝は「中秋盞中主人正斎池亭宴集賦八體」と題して、五言古詩、七言古詩、五言律詩、五言絶句、六言絶句、七言絶句を八句作っている(『否園詩集』卷之二)。浜田先生の前引書簡の略注によると、近藤重蔵寓居となっている大沢家は高家で、蔵書万巻とい

われ、その下屋敷を書物の縁で、重蔵が借りたのであらうとされている。屋敷の模様は南畝の書簡で容易に想像がつこう。

雅望は、寛政期の空白状態から脱け出し、文芸界へ復帰をめざしつつあった。「和文の会」「訳文の会」などを通して、国学者や文壇との交流が頻繁であった。このような状態の中で、蔵書家として知られ、かつ北地探検家としても名が高い近藤重蔵寓居での観月宴であった。相客は文芸界に確固たる地位をすでに築いている山東京伝、滝沢馬琴、鳥亭焉馬それに馬蘭亭山道高彦であり、柳橋の芸者が色を添え、音曲手妻もあるという賑やかな宴であった。そして、寛政十年に松前蝦夷地御用となり、北地探検の折りの土産であるうか、中国やポルトガル産にまじって彼地の道具が参会者の目を楽しませてくれる、いかにも文人趣味あふれる会であった。

○九月十五日、ふたたび近藤重蔵の寓居にて、観月の宴。

▲九月十五夜正斎につどひて月をみる詞

天杯池とハ、天下一といふ地口にやかよひぬらん、月にこころをのべかがみ、おかるがたばの光ありとて、早の寛平法皇の、無双やたらにほめ給ひしより、まかしよがちらす天神さまさへ、罪なき配所の御詩作も有けり、こよひの月のゆくへすむまでとよみしハ、世にうきことの骨にとほりし傘やのむすこ殿の、ろくろくねられぬ船中のすきみなりとぞ、そも奥宿ハ清明なりとハ、吉田の某法師も、二階から招きてぞいひけらし、歌人ハふた夜の月となへ、俳諧師ハ後の月とよぶめり、かた月見ハいむものなりとハ、客に小紋日の口をわる、くつわやどもが手だてなるべし、つらつら神代の書を考るに、あなにゑやいとらしい殿御ちやといひしハ、しまつ鳥うき橋がいどみ詞なりと、蝙蝠纂疏の御説には見えたり、又お月様いくつとかぞへたるハ、子もりのあまが宵まどひせる、たぬきのすけが日記にぞのせたる、いでや芋に団子にゆであぐる、なべて世にある人といふ人、にえ湯のふたのあ

く斗、こよひの月をめどぬやハある、しかハあれど、夜よしとだにも告やらぬにまたぬ臨時の客あらば、油にまじる水の月、とり所なきこちすめりと、紺屋にあらぬあさつてとのばして、あつらへ染のひとつ紋、こくもち月のまるき夜に、まとゐのむしろをひらかれしハ、あはれあるじのみごころの、いたりいたらぬくまこそなけれと、おのが勝手のはな歌まじり、ちと中の字のはら庭を見めぐらひて、芦中の人をの声をしるべに、月の夜みせをひやかすになん、(狂文吾嬌那万俚)

九月望重集蔵中主人池亭

瀧激滄池印月光 露沾蘆荻灑林塘

逸堦黃菊新移種 臨岸丹楓早受霜

條尔往来時命駕 斐然狂簡各成章

此盟尋得中秋會 醉裏幽情不可忘

(「杏園詩集」卷之二)

という詩を作った。右の詩によると参会者はそれぞれ戯文を叙したようである。

○九月二十二日、南畝、雅望に会い、観菊の様子を語る。

▲九月廿一日獨遊果鴨村看菊翌日石川雅子相至云昨同蔵中傲吏過墨

水菊隱居悵然成詠簡蔵中傲吏情見乎辭

君尋東渡菊 我見北園花 境異山兼水

喧無馬與車 珍楚分異種 玉露絶紛華

身拙歸田計 心遊種樹家 聲名流海左

奔走老生涯 欲對清樽酒 幽情各自誇

(「杏園詩集」卷之二)

□右の詩は、題詞にあるように、南畝が九月二十一日独りで、果鴨の

菊を觀賞し、翌日雅望に会って、近藤正斎（蘆中）も同じように隅田川を渡って（正斎が本所仲之郷の大沢家下屋敷を借りていたことはすでに記した）観菊に赴いたことを話し、その時の正斎の心情を詩に作ったというのである。

南畝は九月十三夜から二十夜まで、連夜月見の宴に明けくれたのであるが、勤務は能吏らしく休むことがなく、自から「かかる連夜之合戦二一度もうしろを見せず朝ハ五半時より昼は八時頃まで府中之出勤をかかず 日々之簿書ハ滞なく相済し申候 同寮もあきれ果候て誰も誉るものハ無之候」と紀輕人に書き送っている（九月十五日の項引用書簡）。

雅望もこの時期には、健康を持ち直したようで、観月宴に西郊成子村から、はるばると東端の本所まで二夜も出かけている。そして、南畝ともしばしば会っているし、そのほか文人たちとの交流も盛んである。

○九月末ごろ、南畝編集の『ひともと草』に、「和文の会」の成果を収められる。

▲南畝の序文

これは寛政十一己未の年の春、孝義録の事うけ給はりて、日々に昌平の学問所に行かよひつつ、孝子義人の伝文を書けるつゝに、和文の手を棄もしまほしく、近きわたりの諸子と約して、月ごとに一たび草堂に会して、和文のかたかける稿本なり、そのことは大江戸のみやこちかき、むさしの草々かきあつめぬれば、かりに一もと草と名づく、もとより人々の草稿をあつめてつづり置たれば、人のみるべきものにはあらず、和文あり狂文あり、そのさまじどもどろなれど、二人三人はすでによもつ國のまらうどとなれるもあれば、さすがにすてがたし、これもまた世をふる葛籠、屏障の骨をまかくすべき料ならんかし。

文化三年九月 鴛谷吏隠

□「和文の会」については、すでに寛政十一年の項において記したので省略する。『ひともと草』に収められた雅望の和文は、「富沢町朝市」「両国橋の記」「馬喰町旅籠屋」（『新燕石十種第二』による）の三編である。のち文化六年に「やくし堂」「よたか」の二編を加えて『都の手ぶり』と題して刊行した。

さて、この『ひともと草』および関連して雅望の作品について、いささか疑問を持っているので、ここで少しく記してみたい。『ひともと草』は、先に記したように明治四十五年に『新燕石十種第二』に翻刻、また『百万塔』にも活字化されている。そして、昭和五十二年四月に中村幸彦先生の解題で、大東急記念文庫善本叢刊第八巻『近世自筆稿本集』に収録され、「和文の会」出席者の手蹟を容易に鑑賞できるようにになった。この大東急本は『新燕石十種第二』に所収された時の底本であった。しかし、もと上下二巻のものを、上、下ノ上、下ノ下と三分冊に改裝されており、その際「六阿弥陀詣」（藤原草）、「富沢町の朝市」（石川雅望）、「草市」（滝沢解）、「白馬台雪」（橘洲）、「本所青物市の文」（談洲楼馬馬）の五編を欠いている（中村先生解題）。

中村先生は解題で「（前略）もしこの五編をもって一巻としたものが、どこかに残っているならば、存否だけでも知りたいものである」と記されている。そしてつづけて「なお、石川雅望の『都の手ぶり』と題して刊行された書に収まる五編の内、三編は、この『ひともと草』のものと同じである。残る「やくし堂」「よたか」の二編も、この作文会の折の作であったかも知れない。そのごとく、この書に残されたものの以外のこの時の作文が、他に伝来されていることも、あるであらう」と記された。ここで、野崎左文のつぎの記事を読んでいたきたい。これは雑誌『俳三昧』に連載されたもので、題して「六樹園

飯盛の伝」という（私は天理図書館蔵の左文自筆原稿を使用した）。

（前略）鶯谷隠士の名を以て『ひともと草』と題して編纂したものが世に伝はって居るが、此時飯盛が綴った文は富沢の市、両国橋、ばくろの町、薬師堂、仏生会、よたかの六章であったのを、此内仏生会を除いて他の五章は後文化六年に至って『都の手ぶり』といふ表題で刊行された（後略）。（六樹園飯盛の伝）

そして同伝において「仏生会」の文章を記している。すでにお気づきのように、右記事によると、左文翁は雅望の和文六編を収めた『ひともと草』を見ているのである。狂歌研究者として、また自から狂歌作者として令名の高かった左文翁が虚説を述べるはずがあり得ないと信ずるがいかであらうか。とすると中村先生の述べられている如く「五編をもって一巻としたもの」か、あるいは「この書に残されたものの以外のこの時の作文が他に伝来されていることも、あるであらう」ということになる。すなわちもう一本の『ひともと草』が存在している可能性がある。

『ひともと草』に収録されていたという「仏生会」の文は、前記「六樹園飯盛の伝」に紹介されているが、更に左文編の『六樹園文集』（慶応義塾大学図書館蔵。同館に『六樹園文集拾遺』もあり、いずれも左文翁が雅望の狂文、和文、狂歌撰集の序、跋など百編を筆写し所収。活字化はされていない）にも収められている。この「仏生会」が『ひともと草』に収められていたとしたならば、同書が所収している文章が大体四季の順序に並べられているので（中村先生解題）、「護国寺の花見」（俊円）のつぎに綴じられていたであらう。

さて、本稿において、「仏生会」の文章を、雅望自筆のものによって紹介しておきたい。これは中村先生御所蔵にかかるが、とくに御許可を賜った。記して先生の御厚意に感謝する次第である。体裁は二枚になっており、それぞれ縦二〇・七cm、横二五・一cmである。紹

介に当たって、漢字は現行文字に改めた。また行替わりは／で示した。

仏生会といへることはいまもなほやんことなき／わたりにて行はせ給ふこととそ大江戸なる／いち人の家にハなへてうつぎの枝引をりて／のきごととこれをさす寺々にハひろ庭にさる／まうけしてゆゆしきまていとなみおこなふその／さま大きなかねの鉢に香水をたたへて／そのうへにあつまやのやうなるささやかなる草／屋めくものつくりて御仏をなかにすゑたり／まゐれる人々ひさくしてゆするまゐらす／これもいにしへハいつつの鉢に五色の水とて／なにくれとむつかしき香ともをあはせいれし／こととなん江次第にハ見へたるいまたた／あまつらをのみ用とそきく老くちたる／尼神さひたる翁なとたふれまろひつ／人おしのけてかしこに入きてすすのをた／ゆるハかりひたをかみにをかみてかの香水を／むすひてめくちあらひつ／むまことみゆる／ものにもをしへてのませなとすあたりハ（以上一枚目）卵の花の盛みせて大寺の垣のしりへぬかつく／まで咲みたれたるにほととすさへたかく／なのりするをききいる人たになきそむとく／なるや又あやしの乞食法師のやれたる／衣きたるかたのこひにかしらつ／つみて灌仏／の桶たつさへてさかむにふちの誕生そと／ののしりありくこれらハ道心ありげにもみへ／ぬをいかなるゆゑありてか世をそむきけむ／しらまほし此日をさなきものハ灌仏の水／をとて墨すりてちひさき短冊に／卯月八日ハ吉日よといへるあやしうよこな／まりたることの葉をかきつ／これをくりやゆやの／はしらにさかさまにはりて蟲やらふましなひに／すなりとそいふなりそも此灌仏と申ことは仁明／の帝の承和七年の四月に清涼殿にてはしめて／行はせ給ひよし続日本後紀にしろしたりさるを／推古のおほん時よりはしまれりと物にしるしたること／そいふかしけれおもふにかのおほん紀に四月八日七月十五日／設斎

とあるを灌仏の事とおもひたかへたるや／とにかくにふるきよりのいとなみにてありかたき／ならはしになむ有ける

以上が『ひとと草』にあったとされる、「仏生会」という題の和文であるが、私はさらに想像をめぐらして「西大明神」と題する一文も、「和文の会」の折の作品ではないか思っている(雅望自筆のものは、中村先生御所蔵。また『六樹園文集』の冒頭にも収められている)。

※十月三十日、五世市川団十郎(狂名花道つらね)没す。享年六十六歳。

▲十月晦日、五代目団十郎こと市川白猿、向島別荘にて死す。行年六十六歳。十一月六日昼時葬式。団十郎、半四郎、幸四郎、男女蔵かはるがはる位牌もちたり。白猿、八月中旬より浮腫。しかれども氣の変わることなし。

十月晦日朝の発句に、
木がらしに雨もつ雪の行衛かな

又、孫の団十郎(時に十六歳)、顔見世市村座にて若衆景清の役を祝して、

顔見世や三升梅の江戸のつや

右吟じて俄に死す (伊原敏郎『歌舞伎年表』第五巻)

□号を白猿、俳名を三升、狂名を花道つらねという。明和七年に市川家の名跡をついでから「助六」「暫」「鳴神」などの家芸の荒事を得意として、非常な人気を博していた。狂歌は早くからたしなみ、四方赤良をはじめとして、天明狂歌界の人たちと親交があり、自からは「塚町連」を引きいて活躍した。とくに鳥享焉馬とは親交が厚かった。狂歌集に『白猿狂歌集』がある。

○この年刊行の便々館湖鯉鮒編『狂歌浜荻集』(三巻三冊)に序文を記す。

▲おとぎたかき便々館のあるじハ、いとすちの四徳をなへたる人にて、宜陽殿の一とよばれて、になき此道の長者なりけり、此ぬし秘曲の集冊をつづらる、いはゆる流泉啄木のしらべにて、玄象牧場の聲あり、あはれ楽天も眼をしばたき、いぬめの少将もはなをかみつべし、此はしつくりかけよとこはれて、めくら法師の蛇におそれず、ふるめいたる聲をそのままに、見ぬ極楽のあましたり、ほちほち筆をはこばすになん

□右序文は『狂文吾婦那万俚』に「便々館狂歌集序」と題して収められている。

『狂歌浜荻集』は別名を『類題狂歌浜荻集』という。湖鯉鮒と雅望はつねに接近しており、雅望撰の『万代狂歌集』(文化九年刊)には、十三首入集されている。雅望の序文は、湖鯉鮒が琵琶連のリーダーであったことから、それにちなんだ文章となっている。

○この年前後か、柳亭種彦、雅望につき狂歌および古典を学ぶという。

▲伊狩章氏『柳亭種彦』(人物叢書・吉川弘文館・昭和四十年)による。

□同書に「(前略)彼が飯盛の門を叩いたのは、文化年間に入ってからで、飯盛の名声にひかれたものであらう」(五十九ページ)とあり、巻末の略年表文化三年の項に「この前後、六樹園宿屋飯盛(石川雅望)の門をたたき、狂歌および古典を学ぶ」と記されている。

種彦が享和元年ごろ(十九歳)、狂歌に親しんでいたことは、「十九年の年の歌也」と頭注した「汐干する頃は花見も乗物をおりてぞ山のかひをひろへる」の歌があり、翌享和二年に「二十歳の歌なり」と頭注した「唐櫛のはきとは見えず春の夜の月は柳のかみをすけども」の一首(『柳亭家集自筆草稿』天理図書館蔵)があることによって明らかである。さらに享和三年、『江戸名所狂歌集』(一名曾古良宇知、梓並門撰)に「心種俊」の狂名で一首入集している。さて、種彦の狂歌の師は誰かという問題がある。伊狩氏は前掲書に、はじめ唐衣

橘洲に師事したが、橘洲が没した（享和二年）のち、飯盛門に入ったとされた。はたしてそうであろうか。

種彦が橘洲門下であったことは、種彦自から『柳亭日記』（文化五年八月十七日）に「我師醉竹老人」と記していることで明白である。しかし、橘洲没後、飯盛門下に入ったということは疑問とせざるを得ない。この点について、土佐亨氏は「柳亭種彦の狂歌と川柳」（国語と国文学、昭和四十一年五月号）において飯盛門下説を否定されている。

いま土佐氏の御論考によって記すと、『柳亭家集草稿』中に「桜山風に狂ははおらん大桜手おくれのせぬうちに詠ん をおかなちがひがつてん也狂歌堂十五点予かとし廿三四の頃」とある。すなわち狂歌堂こと鹿都部真顔に狂歌の点を得ているのである。それは種彦二十三、四の頃であるから、文化二、三年になる。そして土佐氏はつぎの三点を指摘され、橘洲没後の種彦の師を真顔とされた。

(一) 種彦が文化二、三年頃に鹿都部真顔から狂歌の点を得ていること。

(二) 享和三年（橘洲の没後一年）の狂歌集に、古今集の序にちなんでつけた狂名心種俊の署名があること。

(三) 橘洲に師事した種彦の作風が、真顔の作風とも一致していること。

私は土佐氏と同様、真顔師事説をとりたい。狂名について『戯作六家撰』（岩本活東子）は「天明風の狂歌を嗜みて狂名を柳の風成とし後改めて心の種俊とす」と記している。

つぎに雅望の『源氏物語』の講筈に連なったことについてであるが、これは山口剛氏が『修紫田舎源氏』（名著全集）の解説で記されているし、伊狩氏も前掲書において「種彦もはじめは狂歌の師としてつかえたが、やがて国文学上にも教えを乞うにいたったものである。雅望は自宅に門弟をあつめ、古典の講義をしたこともあるらしい

が、種彦もその講筈に列席したという。種彦が雅望から古典の素養を授かったことは疑いない」（六十ページ）と記されている。

しかし、両氏ともその証を提出しておられないが、後年種彦が『修紫田舎源氏』を著作するに当たって、「源氏癖」の雅望から直接、間接に影響を受けたことは間違いない所であろう。雅望の古典文学研究への没頭よりは、拙稿「石川雅望年譜稿」において繰り返し記しているところである。種彦は、この時期の雅望に狂歌師宿屋飯盛としてではなく、国学者石川雅望に深く傾倒していたのであろう。

その後種彦の狂歌活動はあまり見られず、『万代狂歌集』に、藤原為家の詠歌一体などで、制詞とされている句を詠みこんだ「制したる詞よ花よ雪ちるはとうもいはれぬけしきなりとて」の一首が入集されている。また雅望が文政三年に、靈岸島の居に草庵を新築した際に、「靈岸島の新宅物すきせるを見て はしらたてそれもいろはのしるしして家のこのみは雅言集覧」と賀歌を贈っている（『新居狂歌合』文政三年十月）。

結論を記すと、種彦の狂歌の師は、唐衣橘洲であり没後、鹿都部真顔に師事し、確たる証はないものの、『修紫田舎源氏』の著作を考えるとき、その下敷きとなった『源氏物語』に関する素養を、雅望から得ていたであろうということになる。なおこの点に関して、後考を俟つこととしたい。

文化四年丁卯（一八〇七） 五十五歳

○一月、五世市川団十郎の追善狂歌集に二首入集。

▲我をうめるものは父母われをしれるものいとむつひかはしつるちきのなくなりければ 六樹園

琴ひとつ身にもとらぬはかかる時たにはらわたをたつばかり
四夷八荒天地のあひにある人のうやまつて申す君か戒名

（『市川白猿追善数珠親玉』）

□前掲書は、前年没した五世市川団十郎の追善狂歌集で、団十郎と親交の篤かった鳥亭焉馬の編集で、江戸橋四日市の書肆石渡利助より刊行された。

雅望の追悼歌は、団十郎の没直後に詠まれたものである。

※五月十八日、智恵内子没す。享年六十三歳。

□元木網の妻で、夫とともに国文学に親しみ、狂歌も早くから詠み、節松嫁々とともに男子に伍して一方の雄であった。

○五月某日、雅望が判者となり、狂文亭において職人尽狂歌合を催す。

▲文化四年五月於狂文亭職人尽狂歌合興行（「職人尽狂歌合」文化五年刊の識語）

□翌年、この狂歌会の記録は刊行された。同書によると当日の兼題は

「花」「郭公」「月」「雪」「恋」であった。

狂文亭は通称北三左衛門（別に屋根屋三左衛門ともいう）といい、名を慎言、狂名を網破損針金という。人名辞典類では「国学者」と紹介されているが、雑学者といつてよいであろう。

狂歌は元木網に師事し（針金の狂名は、木網の旧狂名であった。のち梅園、静慮とも号した）、晩年は四方側の顧問格であった。雅望との交流は狂歌を通してであるが、のち『万代狂歌集』に六首入集している。彼は長寿で、嘉永元年（一八四八）二月に八十四歳で没した。本年は四十三歳の若さであった。『諸家人名江戸方角分』によると「学者・狂歌師」の印をつけられ「梅園 静慮慎言初め針兼 金春屋敷家根屋」と記されている。当時、芝口新橋の金春屋敷内に住んでいたと思われる。

○某月、成子村の隠宅を引き払い、内藤新宿に移転する。

▲甲斐の街道の新駅に移り給へり（中略）、師（筆者注：六樹園）の娘しげをさちと改めて新駅の里長飯田兵蔵に嫁し給へば、これによりて其莊地のうちに五老師すめ給へり（『永久田家務本伝』巻十二）。

▲石川五郎兵衛宿屋飯盛四谷新宿仲町（鈴木牧之「貼交屏風風処姓名寄帖」）

□寛政三年以来、隠宅があった成子村から内藤新宿へ居を移した時期や、正確な居住地について、従来あいまいであったが（甚しいのは、寛政四年に内藤新宿に移ったとする説がある）、門人であり雅望の縁戚関係にあった橋樹園山田早苗の『永久田家務本伝』の記事により、この不明な点をやや明らかにする事ができた。

『永久田家務本伝』には、移転の時期の記述は無いが、文化四年の条に記されていることや、前年の文化三年に大田南畝が成子村に雅望を訪問したときの漢詩があることなどにより、雅望の内藤新宿への移転は、本年と断定してよいであろう。

その転居先は、長女うめ（さち）の婚家先である内藤新宿の名主飯田兵蔵（山田早苗の従兄庄蔵の妻の弟―拙稿「石川雅望年譜稿（二）」巻末系図参照）の地内であった。そこは新宿仲町であった。しかし、こも息子清三郎の結婚独立（本年か）に伴って、明け渡し別居するのである。新宿仲町の住居は、いわば仮住いであった。

さて、面白いことに、雅望は『北越雪譜』の著者として名のある越後の鈴木牧之と文通があったことで、前掲の資料によると、時期は不明ながら、雅望は狂歌を牧之に贈っている。しかし、牧之と雅望は生涯会うことはなかったと思われる。前記資料の雅望の名の上に「文通之部」の印が記されている。

○七月ごろか、息子清三郎結婚するか。

▲男清澄（中略）娶り給へり、妻の名けい（後略）（『永久田家務本伝』巻十二）。

□清三郎（塵外楼清澄）の結婚の時期は不明であるが、翌年五月に長男梅太郎が誕生しているところから逆算推定した。また従来、不明であった妻の名が「けい」であることが明らかになったが、その出自は

今もって不詳である。清三郎は二十二歳であった。

○同月ごろ、息子に居を譲り、内藤新宿の某所に移るか。

▲新宿揚地に住居を移し給へり（『永久田家務本伝』巻十二）。

▲四ツ谷内藤新宿俗ニ宿尻横町ト云所ニ鴻宅ス（木村黙老「戯作者考補遺」）。

▲四谷内藤新宿に居りしが、其宅を清澄に譲り与へて其辺の裏通り上ヶ地と云所に隠居せり（『名人忌辰録』）。

▲おくまりたる所にすまひける時はひりの柱にかきつけける

あなわひしちくちくさして人そくるわれありとたにみやぬすみかを

（『万代狂歌集』巻六）

▲ある年新宿のあたりに家居つくりて住みけるに道遠ければとて孟蘭盆になりても棚経よむべき僧の来らざりければよみて遣しける山里の盆は法師もとはざるをなき人いかで浄土より来る

（『万代狂歌集』巻二・野崎左文編『六樹園家集』）

□従来、雅望に関する記事はすべて「内藤新宿」に住むとしているが、正確にいうと内藤新宿内で転居しているのである。すなわち娘の婚家先（新宿仲町）から、目と鼻の先である内藤駿河守下屋敷西側の小路に面した、俗に「宿尻横町」（失策とも）といわれる、所にである。

再度転居した間の事情は、『永久田家務本伝』に「清澄成長の上、飯田氏地に家作を成して中村屋清三郎と名のりて、みせにせしが……」とある記事から、清澄が結婚、独立して「紙の商い」を始めたことによつて、雅望がその居を譲ったものと思われる。二家族同居するには、手狭な家であったことをものがたるような歌が前記の二首であろうか。その時期は不明であるが、清澄結婚直後とみたい。

○九月、門人亀占正編纂の『狂歌蓬萊集』に、狂歌および序文を寄せ

▲ 狂歌蓬萊集 全一冊

墨付三十五丁

文化四卯年九月

六樹園撰

板元売出 和泉屋平吉

（『享保以後江戸出版書目』）

▲つるかめまつたけはめてたきもののおやにしあればよめとりの洲浜、帯解の縫物にもこれとり出ぬ人やはあらん、ますかみ巫女たちはやあさもよし、きのしか台、産衣の銀紋、扇絵の金泥、いつれもかやく玉光舎のあつめに集めし人々の玉のことの葉よみ見れば蓬萊山もよそならずかし

六樹園

▲ふりにける松ものいはは化たかと人やひつくりすみの江の岸

□亀占正は号を玉光舎といい、通称を住田勘次という、江戸四ツ谷仲殿町に住む彫師であった。彼は家業の傍ら、雅望の門人として狂歌を作り、かつ五側（雅望主宰）の狂歌撰集を数多く手がけている。

彼はのちに本職の彫師としての名声より、関連する他方面に業績をあげている。その一例は、文化六年刊の雅望撰『文化新撰狂歌百人一首』の巻尾に「門人玉光舎占正校」と記されていることである。すなわち、稿本を板にかけて本摺りにかかるまでの校正を行っているのである。この校正は、一冊の書物が完成するのに重要な仕事であつて、校正者の名が書物に載ることは、それだけ出版に占めるウエイトが重いことを表わしている。

占正は『狂歌道の楽』（千里亭藪虎編・文化八年序）に「六樹園取次所」と記載されているし、時代は下るが文政元年刊の『遊里名人寄細見記』（式亭三馬序・錦糸亭綾機催主）に「玉詠集所よつや 住田勘次」と記されている。つまり五側の狂歌取次所もかねて

いた。このことは前記したように、五側の狂歌撰集を数多く手がけていたことと一致する。占正は五側の専属校正者であり、出版者であった。そういうことから、雅望は占正の処女出版の援助をして、序文や狂歌を寄せたのである。割印帳（『享保以後江戸出版書目』の正式な名称）に「六樹園撰」とあるのは、雅望が占正の処女出版のため名を貸したことに由来するのであろう。

○九月、『狂歌新撰東西集』を刊行するか。

▲新撰東西集 全二冊

墨付七十五丁

文化四卯年九月

六樹園著

板元売出 和泉屋平吉

（『享保以後江戸出版書目』）

□本書は前掲資料では「六樹園著」となっているが、現存する同書を披見すると異なっている。すなわち国立国会図書館蔵本によって概略を記すと、題簽に『狂歌新撰東西集』とあり、刊記は「文化四年丁卯九月発行 江戸書林 浅草新寺町和泉屋庄次郎 本銀町三丁目前川弥兵衛 日本橋四日市西宮弥兵衛 神田鍛冶町北島長四郎 湯島切通下須原屋文助 神田鍋町英平吉」とある。

便々館湖鯉鮒の序文によれば、玉光舎占正の集めた諸人の狂詠を、湖鯉鮒以下十六人が評したものである。所収作者はすべて五側の者で、「春」二十丁、「秋」二十一丁、「冬」十八丁、「恋」八丁、「雑」七丁合計七十五丁という構成になっている。『国書総目録』によると、「玉光舎占正編（三巻二冊） 文化四年刊」と「便々館編（二冊） 文政四年刊 ※狂歌書目集成による」とあたかも別種のよう記載されているが、これは同一のものであろう。すなわち「玉光舎占正編」としたのは、序文中に占正が編纂したように記されている

のによるのであろうし、「湖鯉鮒編」としたのは、湖鯉鮒が序文を叙し、かつ判者になっていることによる（『狂歌書目集成』には、文化四年も湖鯉鮒編、琵琶連刊行となっている）。

さて『享保以後江戸出版書目』の記事についてであるが、たしかに「六樹園著」となっているが、この世に「六樹園著 狂歌新撰東西集」は存在しない。このことは、本年に門人亀占正のために『狂歌蓬萊集』の出版を援助した雅望が、今回も力を添えて自から編纂したようにしたものと思われる。雅望は、本書には狂歌はもとより、その名すら記していない。したがって本書は「亀占正編」で、文政四年刊とあるのは再版であろう。湖鯉鮒編としたのは（『狂歌書目集成』）、菅竹浦の誤謬であろう。

※十二月四日、馬場金埒没す。享年五十七歳。

□通称大坂屋甚兵衛。江戸数寄屋橋外二町目で両替商を営む。鹿都部真顔とスキヤ連を結成し、雅望、真顔、頭光らとともに、天明末年に狂歌四天王と称された。初号を物事明輔といい、のち家業にちなんで「銭屋金埒」とも号した。別号に滄洲楼、日頭庵、黒羽二亭などある。撰集には『仙台百首』（寛政七年刊）、『金撰狂歌集』（寛政八年刊）などある。

○この頃、中村屋五郎兵衛とも称していたか。

□文化三年に編纂された『ひともと草』に、「源雅望（中村屋五郎兵衛）」とあるのによる。雅望は通称を糠屋七兵衛（天明五年に亡父・石川豊信の名をつぐ）といったが、寛政三年の事件以来、父方の姓を名のり「石川五郎兵衛」（寛政四年以降）と称していたが、いま三度名を変えたのである。中村姓は、安永年間に結婚したと推定される妻の実家の姓である。

なぜ中村姓に変えたのか、その原因については資料がないので言及できないが、推測すると息子清澄が、中村家を継いだことや、成子村

の隠宅を引き払って、内藤新宿に居を移し、心機一転をはかるという気持ちで働いていたと思われる。しかし、この中村姓も一時的であつたらしく、以後はもとのように石川五郎兵衛と称した。

○鹿都部真顔撰『狂歌董菜集』に序文を寄せる。

▲たか山にたてるまきつきのきにふきををもて伐へからず。おほのはらにおへるすすきたかくやさびたるかまもて刈へからず。ことのほのみちもまたしかり。おのれ不堪無能にしていかにてよしあしのけちめをわくへき。その四とくそなへさらん人は判者たることあたはずとはとしよりあそんの詞なりとか。おほかたの人此さへちをしらす。あるはのらきつねのためにほこらをたてあるはずつほんをやきてうらかたをとふたぐひ世にこらおほし。さるは醍醐の僧正の雨したたりにめて給ひまた道風あそんの朗詠集をさうなきたからとしつるにひとしくまさにをこなすためしならずや。むかしのひとひけらく千里の馬は伯楽にしられ連城のたまは千和にあらはれぬとそふけんほさちののり物をめくらほうしのさくらんには桶とははきのたかひいてきてその金象を見ることあたはし。ここに我友まかほのうしなん学さへにとみたる人にて判者の名も世に聞へたかかりける。かかる人のさたをへてこそ猿馬と駿馬のたかひをもわかち石と玉とのけちめをもしるへけれ。此うしさきに人々の詠藻をけみしてぬきいたしつるつはな集といふみあり。ことし猶春ののにしめはへておのれかおもふつほすみれとる手もすまにえりひろひて此あらまきをはつくりいたしつ。やかてなつけてすみれ集とよはせつ。野をなつかしむひとしあらはあさるしはふのくさむしろまくらことにはすへかめりかし

やとやのめしもりしるす

□本書は四方側（鹿都部真顔主宰）の狂歌撰集で、江戸数寄屋橋御門通山下蘭香堂万屋太次右衛門より刊行された。蘭香堂は、既述したように式亭三馬の婿養子先で、享和三年刊行の『狂歌鵬』の版元である

が、この関係からか四方側の狂歌撰集を数多く手がけている。

さて、雅望はこの年から再び狂歌界に登場することとなるが、その意味をこめて、わざわざ狂歌での名である「やどやのめしもり」と署名したのである。後年、ライバルとなり感情的な対立にまで発展する真顔との仲はまだ良かったのである。しかし、雅望は本書に序文のみで、狂歌を詠じていない。序文は雅望の他に、真顔の有力な門人である秋津島人（狂歌堂島人。初号織月亭。肥後人吉藩主相良対馬守頼徳。文政三年十一月一日没。享年八十二歳）が叙している。

文化五年戊辰（一八〇八） 五十六歳

○正月、読本『近江縣物語』（北尾重政画・五冊）を刊行する。

▲近江縣物語 全五冊

墨付百三拾丁

文化五年辰正月

石川五老著

北尾重政画

板元売出 大和田安兵衛

（「享保江戸出版書目」）

□本書は、雅望の一連の読本の先がけをなすものである。序文に「ひととせ近江国にまかりて、月ごろとどまり居りけるに、山里ながら小家たちならびて、訪ひ来る人すくなからず。折から秋雨しめやかに降りて、さうさうしかりければ、旅のあはれも例ならず覚え居たるに、人々入り来てうち語らふ……」とあるが、これはいうまでもなく虚構であるが、この序文や題名から、文化元年の関西旅行途上、病気で療養した近江日野宿での三ヶ月の生活が脳裡に多少あったのであろう。門人の夙興亭高行もこれをうけて、跋文に「六樹園の大人旅より帰るつきてのち、五巻の文とり出でて、これが清書してよとておのれに賜びつ」と記している。

この物語の素材は、『笠翁十種曲』内の「巧団円伝奇」によっているが、雅望はあくまで、文章を擬古文になぞらえており、序文も『大鏡』をまね、書名も『万葉集』巻七の「青みづら依網よあみの原に人も逢はぬかも石走る淡海縣の物がたりせむ」（訓みは岩波日本古典文学大系による）の歌によっている。この作品の価値は、重友毅氏によれば、原典の「巧団円伝奇」と比較対照すれば、単なる翻案ではなく、雅望の物語作者としての悔りがたい手腕が見い出されるのである（『六樹園の小説』——國語と国文学・昭和十一年八月号）。この点に関して、大田南畝もすでに賞賛しているのである（文化六年の項参照）。このことは「訳文の会」「和文の会」の成果が、ここに結実したとみてよいであろう。

○正月、読本『天羽衣』（江南司馬級画・二冊）を刊行する。

▲刊記に、

六樹園先生著

全部二本

江南先生画

文化五年戊辰正月発行

馬喰町二丁目

西村与八

四谷内藤新宿下町

同梓

東都書肆

伊勢屋吉五郎

四谷塩町老町目

佐久間屋藤四郎

とある。

□自序に「ここにしるせる物語は、駿河国うと浜にすめる翁のむかしよりのつたへごととして語り出でたるを、さながら筆にうつせるなりり……」とあるのは仮託で、素材は謡曲『羽衣』を基盤に、明の馮夢竜著『醒世恒言』中の「両縣令競義婚狐女」や「陳多寿生死夫妻」を

ないまぜにしている。本書については「六樹園の小説」（重友毅氏）や日本名著全集『読本集』の解説（山口剛）が詳細をきわめている。

○正月、黄表紙『^{七役}早替敵討記平汝』（北尾重政画）六冊を刊行する。

□天明三年以来、二十年ぶりに黄表紙に筆を執ったのであるが、この分野は得意ではなかったとみえ話題作とはならなかった。当時の黄表紙界を席捲していた「仇討物」を風刺した作品である。

※正月、息子清澄が滑稽本『長門本忠臣蔵』（蘭斎画・一冊）を刊行する。

▲長門本忠臣蔵

墨付三十三丁

文化五辰年正月

石川清澄著

蘭斎画

板元売出 角丸屋甚助

○一月十八日、大田南畝に中村歌右衛門（芝翫）の行跡を記した書簡を出す。
（『享保以後江戸出版書目』）

▲歌右衛門、高砂町名主（俳名サイバ）と懇意。その縁にて御厩河岸米屋某と吉原丸海老屋へ参り候。座敷にて歌右衛門に祝儀を一両一分遣し候処、野たいと同様に大勢の中にて祝儀をくれ候事と怒り、其後おはぐる楊枝を右の金子にて調へ（かの傾城の齒おはぐる剃て有之候故也とぞ）、それより丸海老屋大いにはらたち、酒樽十駄歌右衛門へ送る。尚また鍔輪金杉の芋を買上げ二十両計送り遣などと申候由、歌右衛門大に恐れ、高砂町名主より吉原町の名主にかけあひ、事相済候て歌右衛門より青籠に鳥をあまた入れ返礼いたし候由。（大田南畝『平日閑話』、伊原敏郎『歌舞伎年表』巻五に所収）

□性傲慢不遜で豪奢をきわめたという、三世中村歌右衛門（安永七年——一七七八——）

天保九年
一八三八) のことで、文筆の才にすぐれ、狂歌作者としてのほか、狂

歌・俳諧もたしなみ『芝翫帖』『芝翫隨筆』『梅玉余響』『盛梅今入
姿』などの著作がある。

南畝は歌右衛門の初下り(文化元年)の時から、彼を嫌悪して、
芝翫事上手に候へども初下りの節 座頭市川男女蔵を下駄にして叩
き申候狂言いたし候 男女は下手に候へども市川と申候名字は江戸
子の大切なる名字なり (浜田義一郎先生『蜀山人大田南畝書簡(中)』大
妻女子大学文学部紀要第七号、昭和五十三年三月)
と書簡に記しているし、また、

堺町の番付に中村歌右衛門の名の左右をあけて書くもおかしくて
江戸ものの仲間はづれの歌右衛門左右のすきて見ゆる番付

(あやめ草)

といったような狂歌を数多く詠じている。南畝の江戸びいきが如実に
描き出されているが、雅望はこのことを熟知していたのであろう。歌
右衛門の逸話は、右の他に前掲『歌舞伎年表』(巻五)に数多く記さ
れている。

○三月、『職人尽狂歌合』(葵園北溪・司馬江南画、二冊)を刊行す
る。

▲ 職人尽狂歌合 全二冊

墨付五十八丁

文化五年辰三月

六樹園判

板元売出 萬屋十三郎

(『享保以後江戸出版書目』)

□ 前年五月に北三左衛門(号狂文亭)宅で催された狂歌合を刊行した
ものである。序文は狂文亭、跋文を文亭一通(別号六一園姓朝此奈
氏、東都西郊ノ人『狂歌画像作者部類』)が叙している。

● 序文

詩をつくることもとよりかたし、詩を評することも亦やすからずとは
宋人の詞なりとか、まさに詩のみしからんやば歌もまたかくぞ有け
る、されば通俊公の後拾遺集は経信公に難せられ、高挺礼が唐詩品彙
は楊用脩に駁せられき、俊盛公の六番歌合の判にはそのかみ顕昭法橋
なん陳状をばかきたる、また謝臯羽の月泉吟社の撰にいのちに漁洋山
人といふもの出て、その甲乙をばあらためたなり、いにしへまでにし
かり、はた今の世にありて人に点つかるまじきものいといとすくなく
ぞあるべき、ひとり我友飯盛のうしなんふみは和漢をいはず、学は古
今をかね、ひたすらにのみ、ひたすらにまなびてなまなまのはかせ、
はづかしきいみじきさえにおはすめれば、歌をえらび歌合の判し給ふ
とも、誰かはしりうてといはむ、此職人尽歌合を見るに、判の詞のめ
でたきはもとよりにて、歌の上なるいささかのやまひもおほひかくせ
ることなし、さるはかの咸陽宮にありけん、あきらけき鐘とは此うし
をこそさし申すべけれ、おのれおもへらく此ごろのざれたる歌どもあ
つめて、ことごとく此うしの鐘にかけたら申しかば、後のあざけり
はまぬがれ、なまじざれとかとありていたりふかき人にしあらずば、こ
とのころをえざとらしかし

文化四年十月廿日あみのはりかね静慮の窓のもとにしるす

文化四年五月於狂文亭職人尽狂歌合興行

● 跋文

ことの葉の勝負わかたんには、判の詞によりてこそ其ことわりはあき
らむべけれ、此頃の狂歌の判者たちは、ふつにさることをせず、さて
は物さだめの博士とあふかむに、かひがひしからぬ心地ぞするや、我
師六樹園うしかくさまのはなしごとをも人のこふにまかせては、あか
らさまにものし給へれど、さるはよしあしのけじめ、すべてくまくま
しからず、論しさだめてこまやかに注しつけ給へれば、其すぢすぢけ

せうにわかれて、だれだれもさだけにそのころをうることになん、此職人尽歌合す去年の春、おのれおもひおこして人々の歌ども集めて、例にならひて吾うしの判をこひもとめつるなり、世にざれ歌よむ人おほかれど、かななのつかひざまをだにわきまへず、せたまれるてにをはにさへ、たどたどしき人もあめればさるもののほんにもなれかしとて、こたび耕書堂のあるじにあたへて、かれが文庫にをさめさせつ、うしのふつくみのたまはんをしらぬにはあらず、此道にとりてはすきずきしき心のやみがたくてなん

文化五年辰四月 文亭一通

平安時代の歌合にならって、狂歌の世界にもこの様式が取り入れられ、作者を左右に分ち、その歌の優劣を決め、判者の判詞を添えるという趣向である。似たようなことは、すでに天明四年に繪盛方が『狂歌角力草』において実施したが、その後あまり流行しなかった。雅望はこれを機に、自から主催し『飲食狂歌合』（文化十二年）や『水魚大会狂歌合』（文政七年）、『今様職人尽歌合』（文政八年）、『武者尽狂歌合』（文化年間）などに判者としても参加するのである。これらに載せられている雅望の判詞は、そのまま狂歌師宿屋飯盛としての雅望の狂歌論が展開されており、格好の資料として注目しなければならぬ。

○三月三日、大田南畝の六十賀宴に出席し、賀文を叙す。

▲ 杏花園先生六十賀

先生の六十賀めでたく祝ふころなれど、たかい唐紙にちくらをこちつけ、雲紙にみみずをのたくらんも順あそんのいはゆるおなしことにてめつらしからず、さきのきかざる小刀細工に、千代万代のことぶきをこめたれバとて、さして長寿のたしともならじ、されどついとほりの追従にも、口にハ銭のいらざれば、夷講のうりかひにならひて、とち万歳もいきの松と、こわだかに謡ハまほしけれど、それもひさしき

名所にて、耳にも秋のねさめとや人いはまし、さはいへど、物はいはひがらとやら、蟻のおもひもてんほの皮神明の納受あるまじきにあらず、そもそも近頃のじまの地藏尊に、子どもを仮の奉公人、請状かいて出す時ハ、其子息災延命なりと、あるものしりのはなしを聞いていかで我先生をも、其教にとおもへども、さいの河原の株式にて、子供の外ハならぬといふ、そこでおのれ智恵をふるひて、地藏からの思ひつきにて長生の親玉といふ仙人のかくれ里へ、先生を誘ひて、小姓奉公に出さんとす、さるハ蓬萊の亀のをわけて、一番先生の尻をもつ氣なり、高野六十のためしもあり、桃源のゆしまよし町に出さば、ほり出し物といはざらんや、御としすこしさだ過給へど、仙人の齡にくらべんにハ、振袖ざかりといひつべし、よしんバ前髪がないといひて、まくつた尻のわれれバとて、其時われら尻くらひ、かまはずにゐるぶんのことなり、

僊家請状の事

一此先生二百歳ハ慥なる人に付、拙者しまつ鳥請人にたち、朝もよし貴殿かたへ、仙人奉公に差出所実正也、年季ハ当三月三日、六十賀の誕辰より、五十六億七千万歳、みろく出世の曉までと相定、しきせハ二季のこのは衣、たちぬハぬきぬのふどしひとつ、尤現金の代として、不死不老の金丹一具、慥に受取申候、右御薬の効にて、長病ハ仕らじ、但みちとせの桃に於てハ、東方朔が例にならひ、取逃欠落いたすべく候、

一玄々皇帝様御法度相守、仙家の御作法相背かず、孫彦やしはどの末々まで邪魔にされ候を、めつたに長生いたすべく候、

一宗旨ハ代々上戸宗、酒に力士の金剛寺坂、但近所ながら切支丹坂にて右の奉公人、ながくあの会の年ノ明まで、御氣にいりまめ福山耕、節分の数をかさねかさね、いつまで草のいつまでも、なまかなれぬ蓬萊の山出しながら御奉公大切にいたすべく候、仍王母が桃

ほどの判をおしたる仙家の受状如件、

所ハ不老門前町台山の五老兵衛

蓬萊屋瀟千殿

〔狂文吾婦那万俚〕

▲ 六十になりけるとし

したかふかしたかはぬかはしらねともまつ是迄の耳たふにこそ

四方赤良

〔万代狂歌集〕卷六

□南畝は三年ごしの念願であった新居を、文化元年二月二十七日に購入して、そこで還暦をむかえたのである。新居での還暦の祝いは、料理三十五人前、酒の到来物六升という程度であったが、大坂の上田秋成から百六首の賀歌などが寄せられた（浜田義一郎先生『大田南畝』）。なお南畝の新居（遷喬楼）については、本稿末に補遺として記したので参看されたい。

○五月、狂歌評判記『評判筆果報』（春盛画・一冊）を刊行する。

▲ 評判筆果報 全一冊

墨付四十四丁

文化五年辰五月

六樹園判

板元売出 萬屋重三郎

〔享保以後江戸出版書目〕

□本書は「獵人の素鉄砲打当た狂言の山」と題する故平秩東作の戯文が序として付せられている（後述）。内題に「六樹園宿屋飯盛先生判 四季恋雑の狂歌総作者目録」とある（この内題を『国書総目録』は、飯盛編として項目を設けているが、これは明らかに誤りである）。

内容は狂歌作者二百四十九人を四季、恋の部に分け、役者評判記にならって「極上吉」から「上上土」まで位付けし、各作者の代表的狂歌を掲げ、作者をそれぞれ批評している。本書が特に注目されるのは、

「五側」という狂歌グループの旗上げの目的をもって企画されたりしたことである。当時の狂歌界は、鹿都部真顔主宰の「四方側」が席捲しており、回りを少数のグループが取り囲んでいる形となっている。

そして、享和三年に式亭三馬が『狂歌艦』を刊行し、さらに文化三年に後編二冊が刊行され、そこに所載されているグループが狂歌界の主流となっている感がある。もちろん雅望のグループは記載されていなかった。『評判筆果報』に載せられている人たちは、すべて五側の人間である。雅望はここにおいて世間に、はっきりと「五側」の結成を公表したのである。

さて、東作の序文であるが、森銃三氏は「東作の文で、その没後十五年目にして公にされたものに『獵人の素鉄砲打当た狂言の山』といふ一篇がある。六樹園側の狂歌の評判記『評判筆果報』の発端に用ひられ」（『森銃三著作集』第一巻）と記されている。このことは「作者故へつつ東作」とあるのでも明らかである。そして、雅望が本書において公表した経過を門人の阡陌園東西南北が、「此文古人東作大人の手沢にて、六樹園にひめおかれしをとり出て、此たびの序とはなしつ。文化五年たつの青陽」と記しているように、東作の文が手稿のままで雅望に伝えられたのであろう。そして、この東作の文について、森氏はさらに「この文はいつ成ったのか明かでないが、多分は天明五年に出た『俳優風』について、また狂歌の評判記を出さうといふやうな計画があつて、東作がその発端の文を書いたのだが、評判記はつひに出ずにしまった」（『前掲書』）と推測されている。

とにかく本書は、前記したように「五側」結成の示威とともに、『狂歌艦』を意識して出版されたのである。ここにおいて「五側」は狂歌界に登場するのである。

○五月二十八日、孫梅太郎生まれる。

▲文化五年戊辰五月廿八日癸亥午刻梅太郎誕辰（「六樹園自筆忌辰

録」収・中村幸彦先生蔵）。

□長男清澄の嗣子である。梅太郎は後年、「梅多楼善福」と号して、祖父雅望、父清澄没後の五側を継承したが祖父、父のような技倆はなかった。梅太郎はのちに祖母（雅望の妻）の実家中村姓をつぎ、中村屋梅太郎と称し、さらに加藤七兵衛（糠屋）と雅望実家の名をついだ。明治三年二月十九日、六十一歳で没した。法名樹宝院香誓浄林居士。糠屋の菩提寺である正覚寺（かや寺・現東京都台東区蔵前）に葬られた。

○七月十八日、唐衣橘洲の七回忌に追善歌を詠ず。

▲唐衣橘洲の七回忌に

野送りの秋もかかりき高燈籠天蓋けまんはたさむき風

（『万代狂歌集』巻六）

右の歌は『六樹園狂歌集』（野崎左文編）では、

橘洲ぬしのみ寺にまうでて過ぎし葬送の事など思ひ出でて

おくりせし秋もかかりきたか燈籠天蓋華草はたさむき風
となっている。

▲唐衣橘洲ぬしの七回忌に

いにしへを恋ひて硯もあらふほど涙かきやる文月のころ

（『六樹園狂歌集』）

▲文化五辰年文月の八日は醉竹園唐衣橘洲ぬしの七とせの忌日にあたれるに便々館ぬしと我師六樹園翁と共に追福に戯歌をあつめて供養をさせるによみける

からころもかへらぬむかししたひつつはや七とせのおもてうらばん

（山田早苗『永久田家務本伝』巻五）

□唐衣橘洲七回忌追善狂歌集には、つぎの二種がある。

●『とこよのもの 橘洲七回忌追善』 一冊 雅望編

●『橘洲先生七回忌追善狂歌集』 一冊 尋幽亭載名編・実吉画

○八月十五日、読本『飛驒匠物語』（葛飾北斎画・六冊）が売り出される。

▲飛驒匠物語 六冊 六樹園作 北斎画 角丸屋甚助

閏六月七日校合本来ル廿七日出来本来ル八月十五日売出し

（『外題作者画工書肆名目集』）

▲斐陀匠物語

文化六己巳年正月

六樹園飯盛著

葛飾北斎画

板元売出 角丸屋甚助

（『享保以後江戸出版書目』）

▲近ごろ六樹園が著したる飛驒匠物語は、笠翁伝奇十種曲の中より趣向を取り出て、文は宇治拾遺にならひ綴りたれど、文のうへをいふものなく趣向の出処を知るもの稀なるべし。

（滝沢馬琴『本朝水滸伝を読む並批評』・『曲亭遺稿』所収）

▲況や建部綾足、六樹園などを大人と称して、その余は撰者の私意をもて褒貶したり、且六樹園は狂歌を専門にしたるのみ、よみ本の作は一、二部に過ぎるに、此人の作飛驒匠物語を第一に出したるはいかにぞや、飛驒匠物語は笠翁伝奇十種曲の一種を翻案して、天朝の故事につづりなしたるのみにて、六樹園が腹内より生み出せし趣向にあらぬを（後略）、

（同『増補稗史外題鑑批評』・『曲亭遺稿』所収）

□本書は自序に「このふみむねとひだ人のたくみがうへをいひて、かつたけしはのふることをさへとりまじへてつづりなしつ」とあるように、飛驒の木匠、猪名部墨繩の妙技に、伝説の名工左甚五郎の俗伝をとり入れつつ、『今昔物語集』の「百済川成飛驒工挑語」を付会した物語である。そして時代を平安時代にとって、さらに『更級日記』に

ある「竹芝寺」の縁起をもないまぜにしている。また全体の構想は中国の『笠翁十種曲』の「屢中樓傳奇」によっている（『日本名著全集』『読本集』山口剛解説）。そのほか本書の素材に関して、墨縄の妙技と古浄瑠璃「飛騨内匠」の關係に注目した説もある（水谷不倒『草雙紙と読本の研究』）。典拠については、佐藤深雪氏が「飛騨匠物語」典拠私考」（『日本文学』一九七七年十月号）において詳細に論じておられる。

作品論として、最近では松田修氏が「『石川雅望』の復権」（『展望』一九七四年十一月号）と題して本書の性格を論じておられるし、これを受けて稻田篤信氏が更に発展させ、雅望の内面にまで立ち入り（とくに寛政三年の事件がモメントの一つとする）、ユニークな作品論を発表されている（『俄草紙』第二号・昭和五十二年、『日本文学』一九七七年十月号）。また構想論については近松半二の『妹背山婦女庭訓』に典拠の一つを指摘する落合靖子氏の論がある（『文芸論叢』2号）。

本書は雅望にとって精根傾けた作品であることは衆目の認めるところであり、今まで蓄積してきた全知識を注入した力作である。さきに掲げた滝沢馬琴の批評をはじめとして、山口、水谷、麻生の先学の論、また最近の研究をふまえ、もう一度『飛騨匠物語』を洗い直し、再評価する必要がある。本稿は作品論まで立ち入らないので、機を改めてこの点について論じることにする。

○九月、『都の手ぶり』蔵版上梓のため自序を草す。また加藤千蔭に序文、門人山本長祥（六出園）に跋文を乞う。

▲丸山季夫氏『泊酒舎年譜』による。

□本書は最初、私家版で上梓することになっていたが、結局翌年（文化六年）五月に角丸屋甚助より刊行された。

内容は江戸において、色彩の強い場所の風俗を得意の雅文体で綴った短篇集である。収められた短篇は「とみ沢の市」「やくし堂」「両国の橋」「ばくろの町」「よたか」の五編で、「やくし堂」「よたか」

の二編は、文化三年に南畝編集の『ひともと草』に収録されている（『ひともと草』については、本稿八ページで詳述したので併せて参看されたい）。

簡単に本書の内容、特徴などについて記すと、「とみ沢の市」は、江戸開府以来の古着市が立つ、日本橋富沢町に集散する人たちと古着の詳細な記述で占められている。「両国の橋」は隅田川に遊ぶ舟の遊興の様と両国広小路で小屋掛けしている諸国の珍奇な見世物小屋の模様を、「ばくろの町」は日本橋馬喰町に集まっていた旅館に宿る旅人たちの生態を描いている。この部分は、かつて雅望自身が旅宿業を営んでいた経験を生かし、旅と人生の無常が旅人の会話中にうかがわれる。「やくし堂」は茅場町薬師堂に参詣する善男善女の群れと、同所で催される植木市の描写が中心となっている。以上はいずれも現実に存在する江戸の殷賑をきわめた場所で、しかも故郷日本橋小伝馬町を追われた雅望にとっては、いずれも熟知した懐しい地である。「よたか」は、以上の四篇が地名の実存性を保持して、名所記的風俗誌になっているのに対して、場所の明記がなされていない。ここに雅望の屈折した心理を見い出すことができる。この点に関して稻田篤信氏が深く追求されている（『都の手ぶり』考、森山重雄編『日本文学・始源から現代へ』所収）。本書は「和文の会」で培われた文章力で、優雅な情趣と現実との間でもし出される面白さがあふれ、雅望の雅文体で書かれた一連の著作中で傑作の一つである。

雅望の和文の技量は、師の南畝もみとめているところで、南畝は竹垣柳塘宛の書簡（年次不明十月四日付）で、

（前略）御碑文之義急には出来申すまじく六樹園かな文よろしく候まは是へ御頼候はば早速出来可申候（後略）

（浜田義一郎先生「蜀山人大田南畝書簡（中）」・大妻女子大学文学部紀要第七号、昭和五十年三月）

と書き送っている。

本書について、滝沢馬琴は例のごとく「又六樹園が都の手ぶり、よし原十二時などいふふみををこし、源氏物語の文にならひて、今の世のありさまを綴りしを、当時めでたしとて玩ぶものもありけれど、これらのふみは只その景致をいにしへふりに写せしのみ情をうつし、趣を尽すものにあらざれば、得たる筆には綴りもしけん。さればとて世に行るるにあらず。畢竟茶屋の評判のみ売物にはなしがたかり（後略）」（「本朝水滸伝を讀む並批評」）と評している。また『しりうごと』（川崎重恭著・天保三年序）は、江戸の風俗を描きながら『都の手ぶり』と題したのは誤りだと見当違いの批評をしている。

本書は文化年間に刊行されたと推定される『北里十二時』（別に『吉原十二時』とも）に継承され、さらに天保三年刊の寺門静軒著『江戸繁昌記』へと流れていくのである。

ここで煩雑を厭わず加藤千蔭の序文、山本長祥（号六出園、狂名麗雪竹）『評判筆果報』所出の跋文を家蔵本によって記しておく。

都の手ぶりのはしかき

赤西のはらハふ田あるも都なしつつこの世々をへぬるまにまに其手ふりのうつりかはれる事なんさハなりける此書ハ石川雅望そのてふりをひとつふたつかいつけたるかくハなれるなり其書る事ハさとし事ながら詞ハみやひことにとりなせりそもも古と今と手ふりのうつりもてゆくことくことハもかたハりゆくものなれハ今のことを古しへふりにかかんハいとたたき事にして石上ふりにし書らよく見わたしてわかものとせされハかくハなししかたきわざそかしはふれことかけるハおもふところ有てなるへし見むひと心あらなん此はしにいささかいつけてよとなにかしかこふまにかくなむ

橘 千蔭

都手振前編一卷我師六樹園先生所著也嘗借鈔其男清澄子頃日求先生校正一過乃上梓以藏文庫云文化戊辰九月 山本長祥識千六出園

雅望と千蔭の關係は、『万葉集略解』以来の知友で、推測が許されるならば、千蔭が「橘八衢」の狂名で狂歌に遊んだ天明以来の知己かも知れない。

※九月二日、加藤千蔭没す。享年七十二歳。

○十二月十五日、雅望が行司となり、信楽亭において狂歌大相撲を催す。

▲日本大学総合図書館蔵の刷物による。

○主催は千雀庵繁見、堪忍舎二字守（いずれも雅望門人である）『評判筆果報』で、判者は雅望のほか浅草市人ら八名である。当日の兼題は「月」であった。

○十二月二十四日、大田南畝『飛騨匠物語』を読む。

▲去年（筆者注・文化五年）師走の末に、八幡塚村にて飛騨匠物語をよみて……（『玉川砂利』文化六年序）。

○『玉川砂利』は、文化五年十二月十六日に多摩川治水の視察に出発し、翌六年四月三日に帰宅するまでの南畝の見聞記である。公務多忙の暇をみて、旅宿で話題作をひもどき旅情を慰めていたのであろう。

○この年、『武者尽狂歌合』（北溪画・一冊）を刊行するか。

▲『狂歌書目集成』による。

○右書に記されているものは存在しない。私の手元にあるのは「文化十一年刊」のものである。推測であるが、本年刊行されているものは、何らかの事情で刊行されずに、文化十一年に体裁を整えて刊行されたと思われる。

『国書総目録』によると、本書は「文化年間刊 陳芬館画」と記載されている。また『享保江戸出版書目』には、文化十一年に『狂歌道

中記』と合冊で、角丸屋甚助刊行と記載されている。『狂歌書目集成』には「葵園北溪・司馬江南画 萬屋重三郎刊」とあるが、何を根拠としているのか不明であるが、一応本年に疑問のまま記しておく。

○この年、『狂歌三十六歌仙』（江南司馬級画・一冊）を狂蝶子文磨と共編で刊行するか

▲『狂歌書目集成』による。

□管見によれば本書は存在しない。

○この年から「六樹園飯盛」の筆名を使う。

□狂歌師として「宿屋飯盛」、古典研究家として「石川雅望」と筆名を使い分けてきたが、「五側」結成を期に「六樹園」の号を狂歌の方にも用いはじめ（『評判筆果報』）、さらに読本に「六樹園飯盛」と折衷した筆名を用いた（『飛騨匠物語』）。これを期に、狂歌にもこの筆名を用いるようになり、さらに一般的に使用するようになっていく。

○この年、唐衣橋洲七回忌追善狂歌集『とこよのもの』（一冊）を編纂し刊行する。

○この年、頭光十三回忌狂歌会の判者をつとめる。

▲是歳光翁十三回忌勸進 干則撰者飯盛、三陀羅、市人。題 更衣・郭公・早苗・蚊遣火・夏旅

□右は黒川春村（三世浅草庵）の『壺すみれ』にある記事であるが、追善狂歌会が催されたのは、題から推して四月（光は寛政八年四月十二日没）か五月であろう。撰者はいずれも故光と親交のあった人たちで、とくに干則是享和二年三月二十五日に光の号桑楊庵をつぎ二代桑楊庵を名乗っている。また市人は周知のごとく、光主宰の伯楽連を継承した人である（のち独立して壺側を結成している）。

文化六年己巳（一八〇九） 五十七歳

※正月二日、浄瑠璃『飛騨匠物語』が、大坂御霊境内芝居にて上演される。

▲『近世邦楽年表 義太夫節之部』（東京音楽学校編・昭和二年）。
□飛騨匠を扱った浄瑠璃はすでに古くからあるが、雅望の『飛騨匠物語』が前年刊行されていることからすると、この上演は何らか関係あるのではなかろうか。雅望の作品が評判になり、これを当てこんで演じられたのであろうか。偶然の感はしないのである。これに関しては時間をかけてもう少し考えてみたい。ちなみに左に『近世邦楽年表』に記されている、浄瑠璃『飛騨匠物語』の次第を掲げておく。

正月二日 蓬葉山ちりやま 飛騨匠物語ひだりくちものがたり 御霊境内芝居

竹芝坂酒瓢ちりやま

太夫本 鶴 沢 伊之助

一冊目 □ 竹本千代太夫

八冊目 □ 竹本 錦太夫

奥 竹本文字太夫

切 竹本 弥太夫

二冊目 □ 豊竹 富太夫

九冊目 □ 豊竹 芳太夫

中 竹本宮戸太夫

奥 豊竹 秀太夫

切 豊竹 秀太夫

十冊目 □ 竹本 絹太夫

三冊目 □ 竹本 理太夫

切 豊竹 巴太夫

奥 豊竹 町太夫

十一冊目 豊竹 芳太夫

四冊目 □ 豊竹 芳太夫

竹本宮戸太夫

切 竹本 錦太夫

景事出語 竹本 錦太夫

五冊目 豊竹 秀太夫

豊竹 富太夫

六冊目 □ 豊竹 富太夫

十二冊目 豊竹 芳太夫

七冊目 □ 竹本 絹太夫

（掛合） 豊竹 町太夫

切 豊竹 町太夫

竹本 絹太夫

三絃 鶴沢伊左衛門

鶴沢 弥太郎

鶴沢 與三郎

鶴沢 市蔵

鶴沢 熊蔵

鶴沢 伊之助

飛驒匠物語
正本未見

百濟の河成
兄悪岡
檜隈松光
左甚五郎

吉田
文吾

美人母ます穂女
仙童子
梅の局
豊松重五郎
吉田八九
若竹栄蔵

船女
主一
娘の
紫宮
吉田
金吾

吉田大五郎

千枝娘雛鶴
吉田
勢蔵

竹芝山人 吉田 文三

蘆屋船主
太郎遠平
吉田 文子

飛千
驛工
匠枝

吉田
新吾

○二月某日、大田南畝、『近江縣物語』を賞賛する。

▲予平生いとまなければ、近頃流行の小説をよむにいとまあらず。六樹園があらはせる近江縣物語をよみて、俗流にあらざる事を知れり。（『玉川砂利』）。

□南畝は雅望の和文や創作力を評価しているのである。永井荷風も雅望の文才を高評して「文章の優美なるは上田秋成の雨月物語に優り、優雅なる滑稽の趣致において江戸文学史上の珍珠にして滑稽小説の規矩となすべし」（『断腸亭日乗』昭和四年十月三十日）と記しているし、また森銑三氏も『近世の文学 下』（有斐閣、昭和五十二年刊）において評価されている。

○二月二十四日、玉川巡視の大田南畝を府中宿に訪問し、狂歌を詠む。

▲六樹園（飯盛）府中のやどりとひて（二月廿四日の事也）、君もまめ我らもまめはまめながらふちうにありてなくわらちくひ……（『玉川砂利』）。

▲廿四日、天氣和暖いささかの風だになし。此春はじめての天氣といふべし……やどりにかへれば六樹園のたづね來れるもうれし（『調布日記』）。

□雅望のこの時詠じた狂歌は、『万代狂歌集』（巻六）に「むさしの

国府中にて大田ぬしにゆきあひける時わらちに足をいためてたへかたかりければ」の詞書がついて収載されている。

意味は、あなたも壮健、私もまめでいますが、この府中に着いて今は草蛙食いの痛さに泣いております。中国の「豆は釜中に在って泣く」という諺の通りです……となる。師の南敵は冬の長旅と公務に耐え、雅望自身は依然として江戸払いの身をかこっているのである。それを「豆殻を以って豆を煮る」の釜中の故事にたとえ、また足のまめにかけた複雑な心境を詠んでいる。

○同日、南畝に芝居小屋普請にまつわる話をする。

▲堺町、葺屋町、普請にかかり候処、只今より屋根を二尺低く、且ぬり屋にすべきやう仰出られしと、六樹園来て物語也（『調布日記』）。

□この事は本年二月八日、北町奉行小田切土佐守、池田筑後守立合いで、勘三郎・羽左衛門・勘弥らに申し渡されたものであった。内容は中村座・市村座・守田座の普請に際して、防災上漆喰で屋根を葺くようにとの達しで、文化七年より実施された（伊原敏郎『歌舞伎年表』巻五）。

江戸を離れている二人にとって、江戸の俗事の話は、格好の慰めであったことと思われる。

○二月二十六日、調布下布田村に滞在中の南畝に酒を贈る。

▲廿六日、空はれて風烈し。終日下田村八十右衛門かやどりにありて……六樹園より駅馬に托して酒を贈れり（『調布日記』）。

□この時期の武蔵野は、強い南風が一日吹き荒れることがあり、筆者も南敵の巡視先の一つであった谷保(国立市)に永年居を構えていたので、春風に舞う関東ローム層の細い粒子に悩まされたものであった。南敵が一日中外出できなかったのもうなずける。こんな時、酒好きの南敵にとって雅望の差し入れは、こよない慰めとなりさぞかし嬉しかったに違いない。

※三月二十八日、醉亀亭天広丸没す。享年四十五歳。

□通称磯田豊吉（弾正）といい、江戸四ッ谷千日谷に住居していた。性来酒を好んで『狂歌酒百首』の家集がある（雅望は序文を書いている）。『狂歌人名辞書』には「都鳥連判者」とあるが、『新撰狂歌百人一首』や『評判筆果報』に入集しているので、雅望主宰の「五側」に接近していたのであろう。酒好きの広丸のために没後「くむ酒はこれ風流のまなこなり月を見るにも花を見るにも」の歌碑が、隅田堤の白髭神社前に建てられたというのが現存しない。麻布の善福寺に葬る。法名栄替浄願居士。

○五月、『都の手ぶり』（一冊）を刊行する。

▲刊記に、

文化六年己巳五月

東都麴町平川町貳丁目

角丸屋甚助梓

とある。また『享保以後江戸出版書目』には、

文化五年辰十二月

都の手ぶり 全一冊

墨付廿五丁

六樹園著

板元売出 角丸屋甚助

と記録されている。

□詳細は本稿二十一ページを参看されたい。なお南畝は本書を所蔵しており、『南畝文庫蔵書目録』の「稗史奇書」の条に「都の手ぶり 一卷 同（六樹園）」と記録されている。

○七月十五日、玉光舎占正主催の狂歌合に出席し、狂歌を詠む。

▲深草はうつらに鳴に雁に声とりあつめたる秋のあはれさ

枝豆のさやけき月にねし人をつまはしきしてふかす秋の夜

□この狂歌合は、『四十八評狂歌合』と題して一冊にまとめられた。このとき雅望は序文を叙しているが、判者にはならず前記した二首の狂歌を詠じている。所収作者や主催者（会主）および補助者名から「五側」の狂歌合であったことがわかる。見返しにつぎのように記されている。

文化六年己巳

補助

七月十五日披露

三番叟早人

一題十二評

五福亭染丸

四十八評狂歌合

春夏亭秋冬

兼花鳥

尾上亭鐘人

四季

千束屋員数

題風月

。

塵外楼清澄

会主

玉光舎占正

雅望の序文

（九州大学蔵）

花鳥のいろをもねをも、とはは後撰和歌集の歌にして、風と月とのあるしなるらむ、とは草庵集にそみへたなる、此よつ物を題となして、みそひともしの狂言をあつめて、四十余人の判をこひしは、たれやの人とたつねつれば、身は花鳥のいろねにうかれ、心に風月のさへをみかく玉光舎といふまめ人なりけり、かうあまたあるすき人の詞をしも、こころのくまくまもとめ出つつ、ところせうひとつにつとへたるなん、いみしうありかたきしわさなりける、いてやわすれかたきハ友たちの言の葉、なつかしきハ花鳥のいろねなり、此ふみ夏の日のなかきまきらハしに、よむとはなしにうちひろけぬるに、しねんに心なくさみにて、花月一窓ノ交りも、めのまへのやう

におもひ出つ、けにつれつれわふる人のためには、またふたつなき

草子なるへし、六樹園

○九月、『新撰狂歌百人一首』（北尾重政画・一冊）を刊行する。

▲狂歌百人一首 全一冊

墨付六十二丁

文化六年己九月

六樹園撰

板元売出 角丸屋甚助

▲刊記を家蔵本によって記すと、

六樹園先生選 門人玉光舎占正校

右一百肖像 紅翠齋北尾繁昌画

文化六年己巳九月発行

麴町平川町三丁目

製本所 角丸屋甚助

とある。なお巻末に南畝五十歳の時の狂歌、

竹の葉のせかるに松の箸たてんつるの吸もの亀の鍋やき 杏花園

が、重政画の松竹梅鶴亀図に付して載せてある。

□本書は注目すべき書といえよう。その一点は、雅望の狂歌論が展開されていることであり、二点は天明時代に自から北尾政演（山東京伝と組んで編集した『吾妻曲狂歌文庫』『古今狂歌袋』に倣って、今度は、北尾重政という当代一流の画家とともに、五側の有力狂歌作者百人の肖像を狂歌一首を付して掲載したということである。

まず第一点についてであるが、雅望は序文ともいうべき箇所です。「狂歌のおこり」、「狂歌を無心体あるは栗本といふは誤りなる事」と題して、論を展開しているが、このうち「狂歌のおこり」が文政期にかけて鹿都部真顔との対立の口火となったのである。煩雑を厭わず全文

を記しておく。

○狂歌のおこり

万葉集に戯咲歌あり。但かの集にさる名目は聞えざれど、清輔朝臣の奥義抄その外の書にもさる名目をばのせられたり。これははしつくりの詞によりてしかなづけられし物なるべし。さしつきには、古今集よりのちのちの俳諧哥これらみな今の狂歌にかよひたる物から、あがれる世人のことはにて、ことごとく雅言なれば、いにしへをよく学びざる人には、たやすくよみ出ることかたかるべし。今の世には狂哥をさして俳諧哥とおぼえたる人あり。狂歌は俗語をもてつづけいふなれば、これを俳諧哥なりといはんはあまりなるしひことなるべし。それも他人のよみたらんはさもいひてん。みづからのにいはんは、をこがましく雅俗のさへちをだにしらぬやうにてかたはらいたきことならずや。さて今のごとく俗語もてつづけいへるは、いづれの時にかはじまりけんと問ふ人あり。おのれ答ていへらく、将門はこめかみよりぞいられけるといふ哥、藤原左近がよめるなりと保元平治物語に記したり。それよりつぎ世々のいくさ物語に落書とてあるは、大かた今の狂哥のふりなり。これは京わらべのさがなき口より出たる物とのみ人おもふめれどさにあらず。九条の大相国などこととしてよませ給ひしよし愚管抄にしろされたり。さればやごとなき御人こそ、かかる戯れは物し給へりき。今の人は落書体とて、いみじくいむ事にすめれど、そのもとはこれぞはじめなりける。さるはその時代のさがをいひ、人のうへをそしりよみたらんこそ罪うべきわざとはすべかめれ。ただ月花にむかひて風流のこころをのべいはんには、さる体なりとて何の咎かあらん。されば狂哥は狂哥とてあるべきに、あながちに其道をたかくせんとて、うけばりて俳諧哥なりなどいひて、ひちもちいかめしうふるまはんは、人わらへなることなりかし。

詳しいことは本稿では論じないが、この論の背景には、鹿都部真顔

の狂歌論に対しての批判がある。すなわち、真顔は天明狂歌が気魄を尊重するあまり、粗奔無軌道に陥ち入ったのを是正し、鎌倉室町期の狂歌が本来の姿であるとして、和歌に著しく接近し、そのためには狂歌の余臭を払拭して、「俳諧歌」の名のもとに新生面を開こうというのである。

これに対して雅望は、天明狂歌の弊害はみとめるが、本質はすこしも非難すべきではなく、むしろ月花にむかい風流心をいい表わすのに、落書体で表現するのが狂歌であり、俗語をとり入れるのが狂歌である。俳諧歌というのは、雅言をもって詠じるのであるから、今さら狂歌を俳諧歌と称するのはおかしいという立場をとっている。いいかえれば、両者の対立は「文学における滑稽の問題」といえよう。これを機に両者は、ことごとく対立していくのである。

つぎに第二点であるが、『評判筆果報』で自派（五側）を誇示したのであるが、本書において自派の百人の有力作者たちの肖像と狂歌一首を載せた。さらに自論を証明するように、見返しに「頭書引書目録」として『万葉集』から『狂歌才蔵集』（上代—近世）までの和歌集、物語、狂歌集など六十種の書目を掲げ、これらに載せられている狂体和歌と作者を欄外に記している。

本書は以上の二点から、雅望が「六樹園飯盛」という狂歌師として、狂歌界に復帰したことを世間に示した書であった。

○某月、三囲稻荷へ狂歌額面を奉納する。その後、料亭八百善にて酒宴を催す。

▲文化六己巳年、三囲稻荷へ狂歌額面一今にあり。六樹園社中にて奉納す。此時六樹園先生はじめ八九人にて額面奉納にいたる程、牛込揚場より林丸と云ふやかたにのりて、晴天のどかにて三囲へいたりて額奉納すみて、堀へ付て新鳥越の八百善へいたりて酒喰す。此頃此八百善の見世の始りにて、すべて器物古代のめでたきものにて、料理新製

珍敷よし評判によりて至りけるに、玄関に袴着し候者出むかへて座敷に伴ひをらせて佳肴を出せり。座敷より万物心してきれいに思はれたり。これによりて此楼上に額面一面に狂歌を珍金彫にして友たち五人にて遣したり（山田早苗『永久田家務本伝』巻五）。

□当時の狂歌師の生活ぶりの一端がうかがえて興味深い記事である。三囲神社には、この時納めたといわれる額面は現存しない。

○『孝経平仮名付』が再刊される。

▲寛政九年の項参照。

文化七年庚午（一八一〇） 五十八歳

○一月、狂歌評判記『春興帖』（一冊）を撰して刊行する。

□門人の亀占正編集、同じく門人の狂蝶子文麿の序文を付して刊行された。本書はいわゆる「五側」の一連の狂歌評判記で、例のごとく役者評判記の体裁をとり、五側の作者二百八十三人の批評をおこなっている。雅望は着々と自派の勢力拡張と、その地位を不動なものにしつつあった。

※一月九日、節松嫁々（朱楽菅江妻）没す。享年六十六歳。雅望追悼歌を詠ず。

▲節松嫁々刀自をいたみて

家の風高くふかせしふし松のおひきなされし琴ぞ恋しき

（『六樹園狂歌集』）

□天明狂歌の大立物の一人、朱楽菅江の妻で、幕臣小宮山常右衛門の娘、名を「まつ女」という。菅江没後によくその一門を率いた。狂歌は天明時代より、数多くの狂歌撰集に入集し、智恵内子とともに女流狂歌師として活躍した。

※一月二十五日、唐来参和没す。享年六十七歳。

○閏二月二十七日、鳥亭焉馬が主催して、牛御前境内に桜樹五本を奉納。雅望も名をつらねる。

▲閏二月二十七日より、本所牛御前本地大日如来開帳あり。奉納もの数多ありて参詣群集。談洲楼焉馬老人主催にて桜樹五株を奉納。右老人分難費金三步式朱也。桜は門前の右の側に植けるが、故ありて石面は焉馬老人狂歌碑の左傍に立つ……(式亭三馬『式亭雜記』)。

□『式亭雜記』には、三馬が写した石碑の図がある。それによると参加したのは焉馬・雅望・三馬・徳亭三孝(三馬の門人)・朝寝坊夢羅久の五人である。なお石碑は文化八年三月に建てられた。

※ 四月、少々道頼没す。

▲ 少々道頼なくなりぬとききて

赤 良

せうせうの道よりなればよけれども十万億土さつてかへらず
思ひきや芝居かへりの道よりか香花の屋にならんものとは
道頼か宅は乗物町にてそありける

(『万代狂歌集』巻六)

□道頼は号を花廼屋、通称森八十八といい、本町側判者(『狂歌鰯』)であった。雅望とは交流があり、道頼が両国にある料亭「大のし楼」で狂歌会を催した際、戯文を叙している(『狂文吾嬬那万俚』に「花の屋道頼会集」と題して収)。また『万代狂歌集』に「春雨を 花のみか人のためにも母親の朝寝をゆるす春雨の宿」の歌が入集している。

※五月十一日、大屋裏住没す。享年七十七歳。

▲ さつき十一日裏住身まかりぬと聞て 四方 赤 良

長櫃と思ひし物を重箱のお萩となりぬ秋もこぬ間に

(『万代狂歌集』巻六)

□本姓久須見氏、通称白子屋孫左衛門という。初号大奈言厚記、萩廼屋窓雪院とも号す。家業は初め更紗屋であったが、のち金吹町の大屋となる。本町側を主宰した。余技として狂歌の他に「野呂松人形」の名手であった。裏住は天明時代から活躍し『徳和歌後万載集』『吾妻曲狂歌文庫』などに入集し、『万代狂歌集』にも八首収録されている。

る。

○六月十九日、大田南畝の愛妾おしづの十七回忌にあたり祭文を記す。

▲ 妙閑信女十七回忌祭文

我おもとえんり江戸町をはなれて、西方のつき出しとなりてより、紋日物日のくげんなく、上品上生のお職とよばれて、いつつふとんの蓮台に乗て、無量寿仏のあげつめとハ、ありがたへまに織出せし、まんだらでない果報ならずや、けにや紫雲たなびく道中にハ、惣花を茶屋にふらず、これ前生のうらやくそくから、すぐに浄土にあつづけなじみ、お文様やら一枚起請、せいしふげんに文珠のちゑ、たんと手のある観音をさへ、友朋輩にすがかきの、音もたふときささら浪、実相むろのうみべなる、長者も及ばぬ全盛とハ、見せ行燈の光明にもしられき、おのれ御印文の判人めけども、君が年忌をかぞへ見て、けふ靈前にむかふの人、ちょっと茶漬の祭文をくぜりつ、かの格子さきのきせるにはあらで、回向にくゆらす香炉のけふり、ころざしハ松葉屋の、青ウきりうけてくんなんしと申す(『狂文吾嬬那万俚』)。

□天明六年七月十五日に、大田南畝は新吉原松葉屋の三穂崎を落籍し「おしづ」と名のらせたが、寛政五年六月十九日に三十歳ぐらいで病死した。

南畝はこの薄命の女性の死を悼み、命日の六月十九日には、浄栄寺で「晴雲妙閑忌」を営んだ。浜田義一郎先生によると、これにちなむ歌を作ること常とし、現在享和三年、文化二年、六年、七年、八年、九年、文政四年の記録が残っている(『大田南畝』)。雅望はおしづと南畝を、落籍直後の天明六年八月二十八日に頭光とともに訪ねている(拙稿「石川雅望年譜稿(二)」)。雅望の右の祭文は、標題から「文化七年」に叙したものである。

○九月、『堀川次郎百首題狂歌集』(北溪画・二冊)を刊行する。

▲ 堀川次郎百首題狂歌集 全二冊

墨付七十五丁

文化六己巳年九月

六樹園撰

板元売出 萬屋重三郎

〔「六樹園狂歌集」〕
以後江戸出版書目

□『狂歌書目集成』には文化九年刊とある。家藏本（野崎左文旧蔵）によると、文化六年刊で『享保以後江戸出版書目』の記事と合致する。本書は五側の狂歌撰集である。

○九月九日、大田南畝の亡父二十三回忌にあたり、南畝宅を訪れるが不在で会えず。

○九月十日、大田南畝より書簡を受けとる。

▲拝見仕候、俄之冷氣弥御清雅珍重候 昨日ハ御出之よし白山へ参不仕在宿候キ 香資一片御米一器辱とく備盡前申候 年光瞬息ニ而二十三回と相成候 御書物急ニ認上申候 十四日御光来奉待候 已上

九月十日

六樹園主人

蜀山人

□右の書簡は中村幸彦先生御所蔵のもので、浜田義一郎先生が紹介された（「蜀山人大田南畝書簡（中）」大妻女子大学文学部紀要第七号）。南畝の父は天明八年九月九日七十三歳で没した。雅望は南畝の書簡にあるように、本月十四日に再度訪問したかは不明である。

※十二月四日、初代森羅亭万象没す。享年五十五歳。

□竹杖為輕の狂名で天明時代より知られている人物であり、黄表紙・洒落本・滑稽本の分野でも活躍。また蘭学普及にも貢献するという多才ぶりを發揮した。幕府の医官桂川甫周の弟で森島中良という。

○同日、三世瀬川菊之丞を悼む狂歌を詠ず。

▲瀬川仙女をいたみて

手向にと焚燵らせどいつの世に反魂香の所作をだに見ず

〔「六樹園狂歌集」〕

□菊之丞は幼名七之助、俳名を玉川・路考・仙女などという。屋号は富士屋、のち浜村屋という。宝暦元年大坂の振付師市山七十郎の次男に生まれ、狂言作者初世瀬川如皐の実兄に当たる。安永元年十一月、大阪中の芝居で瀬川菊之丞を名のり、翌年十月江戸に下り、瀬川家に入門。翌三年に瀬川家の養子になった。

天明二年には「当時名譽愛敬」とうたわれ、総巻軸の位にすえられ、江戸若女房の随一と評判された。寛政元年三月市村座の「其佛浅間獄」と「執着英獅子」では、江戸中の人気をよび客止めの盛況であったという。翌二年冬には中村座、市村座を兼動して、同五年には極上上吉に進んだ。文化五年十一月には、女方では異例の座頭の地位を占めた。

彼は風姿容貌にすぐれ、口跡もよく地芸と所作をかね、娘方・傾城などの色女方を得意とした。当たり役は「道成寺」「石橋」「無間の鐘」のほか、「黄八丈」のお駒、「廿四孝」の八重垣姫、「青楼詞」の八橋、「伊達」の高尾、「関の扉」の墨染、「桂川」のお半などである。

○この年、遠藤春足が雅望に入門する。

▲木のほりの高きことばにさるものの四国にありと我さへぞ知る

六樹園

さるものと君の仰せにいとどわがつらも真赤になりてはづかし

雲多楼

〔「六々園漫録」一〕

□春足は号を六々園、狂名を雲多楼鼻垂という。通称遠藤菟治右衛門という、阿波国石井の監商人である。武州八王子に支店を持っていた。

春足は性来、文学好きで後年、雅望が『雅言集覽』刊行の際、本居

大平などに紹介の勞をとったりした人物である（拙稿「石川雅望『雅言集覽』の出版経緯について」）。この年、自詠の狂歌五十首に跋文を添え『猿が人まね』と題して、雅望に進呈すると同時に入門したのである。その折の贈答歌が前記したものである。入門早々に『万代狂歌集』に二十四首も入集していることは、才能があったと同時に、『雅言集覽』の件が関係していると思われる。

○この年、『富士見新十三景狂歌登遠眼可禰』を鈍々亭、千桜亭らと撰して刊行する。

▲『国書総目録』による。未見。

○この年、烏亭焉馬狂歌碑に彫られた狂歌の用字について、焉馬との間に議論があったという。

▲焉馬老人狂歌碑は、門を入て（粕谷注・牛御前）右の傍大樹のもとにあり、書は本所石原駒知道主人書、堪忍の二字虹とにじのかな違也、活東子云かな違といふは却て非なり虹もニジ也（式亭三馬『式亭雜記』）。

※同書に「いそかすはぬれましものと夕立の跡よりはるる堪忍のに
し 談洲楼焉馬」の刻したる石碑の図あり。

▲大田南畝の会に、六樹園飯盛狂歌堂真顔をはじめ、当時の狂歌師大かた出席して、頗る盛会なりしに、談洲楼墨金、六樹園に向ひて、かつてそれがよみける。

いそがずばぬれざましを夕立のあとよりはるる堪忍の二字といふ歌を碑にありて、たてんと思ふよし語り、ゆふだちをば夕立と書くべきか、また白雨とかくべきにやと問ひけるに、六樹園は何とも答へず、おろかなる事いふものかなといへるおももちにて空うそぶきてありければ、談洲楼も手持なきさまにて、また問ふ事もせざりしが、その時の六樹園のさま、いかにも憎げに見えけりとぞ……（中村秋香『秋香歌がたり』）。

□『秋香歌がたり』はつつけて、席上ある人が俳優の文盲の例として

「小枝こえだ」の笛を「小枝こえだ」の笛と誤って言ったと語ると、雅望が「俳優の誤ちは『牧拳』にいとまがない」といった。雅望を憎く思っていた人達は、雅望の誤りを何もいわなかった。そして雅望が焉馬の間に答えなかったのは、焉馬を侮ったのではない。先ほどの夕立と白雨の問題は、単に用字のことではなく、碑に刻す歌にしては下手で、恥を永久に残すことになるというのである。

右の挿話を中村秋香は、花月庵の筆記にあるとしているが、その根拠は不明である。これは雅望の傲慢さを物語る挿話として紹介している。

文化八年辛未（一八一七） 五十九歳

○春、『狂歌評判記』（五清、北溪画・一冊）の判および序文を記す。

▲内題に「六樹園宿屋飯盛判狂歌惣作者目録」、序文に「文化八年未の春 六樹園」とある。版元は角丸屋甚助である。

□序文は「音聞高きしらべの鼓は古狸の化の皮」と題した戯文になっている。板下は門人の玉光舎占正（住田勘次）である。内容は五側と目される二百二十六人の作者を四季・恋・雑と和歌集の部立にならって分かち、それぞれに作者を配してこれらを賞賛し、役者評判記になぞらえて、雅望が判詞を付している。

賞せられてゐる主な作者を記すと、「巻頭 極上上吉 皎雪庵梅照」、春之部「大上上吉 不齊亭常友、瓢箪園一寸法師」、夏之部「真上上吉 花鈴園多樹」、秋之部「功上上吉 浅雨庵疎喜」、冬之部「大上上吉 鯛亭鱧雄」、恋之部「大上上吉 水菰園外成」、雑之部「至上上吉 橘樹園早苗」である。

○三月、前年二月に牛御前に桜樹を奉納した記念に石碑を建てる。

▲『式亭雜記』に図あり。本稿二十七ページ参照。

※四月二十六日、千種庵霜解（書肆山中要助）没す。享年五十一歳。

□壮年のころ常陸から江戸に出て、浅草馬道に住居したが、のち諏訪

町に移りそこで書肆を営んだ。狂歌は頭光の門人で、のち浅草市人と結び「壺側」の判者となった。また寛政八年に本居宣長に入門したこともある。書肆としては「伯楽側」の狂歌本を数部刊行している。

○五月二日、『雲茶集』の序文を叙すか。

▲文宣王のおもとのあたりに、こしかけ茶屋のにぎはへるあり、一河のながれ一樹の陰、これも他生の縁側に、一冊のさうしをおきしは、詩歌連誹諧のことハ、素人黒人のへだてなく、いらせ給ふを待とりて、書て給へのあるじが結構、かの茶どころの宇治重相の、唐天竺のはなしの会、今ハむかしのふることを、ちよつとつまんだ雲茶集、茶碗にしろき詞の錦手、床几とともにならべ給へと、ちとくちばしの長過た、やくわんあたまをふりたててまうす（「狂文吾嬬那万俚」）。

▲きのふ小石川雁金屋金吉殿来駕ありて、吉原並に三芝居等の古物古器珍書会を催すよし談話、在下出席すべき旨承知、尤初会は済たると云々、会亭神田明神表門前、聖堂のうしろ茶亭にて雲茶店、後会の定日五月二日云々（『式事雜記』文化八年四月十二日）。

□この年の四月二日を初会として、以後毎月二日神田明神前の雲茶屋において、書肆雁金屋清吉（平々山人）の主催で珍書画会が催された。その記録が『雲茶集』で、大田南畝も参加し、文化八年三月六日付竹垣柳塘宛の書簡に、

春晴日麗清興如何

御書一冊 御写之上又々

拝借奉願候

右返上仕候 さてさて面白き事どもに御座候 摂州伊丹より文通等奉入御覧候 去上巳山東京伝京山に内会いたし曲水にかへ申候 珍書珍画賞会いたし 来月より月々二日と相定 神田明神前雲茶店と申候茶店の楼上へ 二百年來の古物青樓戲場其外之俗ナル古物を持より申候 尤大連に成候へばあしく候間十人迄に限り 一人五品を限

り申候 素見物は禁じ申候御閑暇に候はば御出會奉待申候 近隣書肆青山堂雁かねや発起に御座候 俗物は一切入不申 小連に限り申候 京伝京山は是非來るよしに候 早々

三月六日

柳塘大兄

蜀山

（浜田義一郎先生「蜀山人大田南畝書簡（中）」大妻女子大学文学部紀要第七号、昭和五十年三月）

また『一話一言』卷三四に南畝は「雲茶集序」を草しており、同時に出品者と出品物を記録している。同書によると初集（四月二日）と二集（五月二日）の出品者は、佐々木花禪、中尾老樗軒、山東庵、青山堂、紀束、雲茶店主、尚志堂、曳尾庵、立川馬馬、反古庵などである。

雅望も参加したことは間違いない、戯文に「文宣王のおもとのあたりに、こしかけ茶屋のにぎはへるあり」とあるように、「文宣王↓孔子↓湯島聖堂」で、聖堂の尻のあたりというと神田明神をさしている。主催者の雁金屋は、狂名を青山堂批杷磨といい、五側に属していた。

○六月、千首樓堅丸撰の『狂歌江戸砂子集』の判者になる。および狂歌を詠ず。

▲隅田川わたしにそひてつはなうる子とはめしてこえませといふ
□江戸の地名を狂歌に詠んだ、いわば江戸地名狂歌集の類（書名は江戸地誌として有名な『江戸砂子集』による）で、雅望は松風台停々・千猿亭業枝・蘭奢亭香保留・千首樓堅丸・便々館湖鯉鮒・貢庵則次・千林亭面吉・千花園春友・庭訓舎綾人・便々亭真影・千金亭如蘭・千桜亭花房・花廼屋道頼・東夷古渡・淮南堂眉住・桧舞亭造・浅草庵市人・平秩東作らとともに判者になっている。本書は東作、道頼などの故人が入っているので、かなり前に成立しており、何らかの事情で刊

行が遅れたものと思われる。

本書は上(三十五丁)、下(二十九丁)二冊で、堅丸の序文を付して、須原屋伊八・北嶋長四郎から刊行された。

※六月二十八日、元木綱没す。享年八十一歳。

□この著名な狂歌師については、いまさら言を要しまい。天明狂歌全盛時代の生証人がまた一人没した。

○七月六日、孫没す。俗名享年不詳。

▲自秀禪童子(永昌寺過去帳)。

▲七月六日子の身まかりて七日すきぬるほどに盆いとなむとて魂棚にむかひて

清 澄

おもひきやなれか産着のしつけ芋のをからを盆にそなふへしとは

清澄ぬしの児のなくなりけるによみてつかはしける

生鯛鱸雄

児におくれたまひし君をとはんにもやはりさきにたつわか涙かな

(『万代狂歌集』巻六)

□清澄の歌から推測すると、生後間もなく亡くなったものとみえる。

父清澄と同じ永昌寺に葬られた(文化十三年の項参照)。

○九月、『狂歌画像作者部類』(五清画・二冊)を刊行、序も叙す。

▲刊記に、

文化辛未季秋発行

書肆 東武 角丸屋 甚助

尾張 永楽屋東四郎 梓

とある。

□五側の肖像入りの作者名鑑としては、文化六年の『文化新撰狂歌百人一首』につづいて二冊目のものである。本書は作者(肖像有・無しととも)の住居、職業(家業)などを記していることが新しい試みで、

これは現存作者はかりではなく、貞柳・ト養といった三十人の古人にも付している。五側(柱に互の印を刻する)のデモンストレーションとしては効果があつたに違いない。

所収作者の分布も別表に示したように、全国的で人数も多くなっている。これは明らかに真顔の四方側を意識したものである(書肆に永楽屋が加わっているのは、東海地方の狂歌壇を十分意識しているからであろう)。永井荷風は「政演の『狂歌五十人一首』(天明六年刊)に倣ひたるものなるべし」(『江戸芸術論』収「狂歌を論ず」)と本書を注目している。ちなみに荷風のいう『狂歌五十人一首』は、若き日の雅望が、北尾政演(山東京伝)と組んで萬屋重三郎から刊行し、世人に圧倒的な歓迎をうけた書であつた。

	肖像入	肖像無	計
羽後濃野野陸総蔵戸斐河江河濃張勢津坂都磨波	5	38	43
奥越信上下常上下武江甲駿遠三美尾伊撰大京播阿	14	74	88
	6	22	28
	1	5	6
		4	4
	8	13	21
	7	12	19
	86	238	324
		9	9
	4		4
	1	2	3
		1	1
	20	11	31
	11	17	28
		6	6
	3	4	7
	3	10	13
	2		2
	1	5	5
計	172	473	645

○十月、『自讃狂歌集』(魚屋北溪等画・一冊)を撰し、序文を叙して刊行する。

▲刊記を家蔵本(野崎左文旧蔵)によってしめすと、
撰者 六樹園宿屋飯盛

門人 玉光舎龜占正校

彫工 住田勘次

文化八季辛未孟冬刻成

信楽嘉七

同蔵

玉光舎占正

とある。

○序文

自讃狂歌集叙

玉光舎が狂歌毎盡、月毎に連中の数そひて、かきぬきの本籤より、詞の花くじとりとなる中に、拳ずまひの閑あらそひ、役者のみぶりこわいろもめづらしからず、とひねった所をみなせのかし寮、こちらで一會ひらきの趣向、一人一首のひき物も、かず百膳にあまりたる、かけ金自讃狂歌集、なにはのうらやみなきやうにと、順をさだめし大坂くじ、あけて見たまへ、よしやあしや

六 樹 園

□本書は見返しにある「六樹園大人著述目録」に二、三篇刊行の予告はあるが、刊行されなかった。柱刻に「五」印があることで明らかのように五側の肖像入り作者名鑑で、本年刊行の『狂歌画像作者部類』につづくものである。百十八人の肖像（住居記入なし）に狂歌一首が付されている。

地域別の分布はつぎのようである。上野二二・江戸三四・甲斐一・奥羽一五・武蔵一〇・下総一・上野四・上総五・遠江三・駿河二・美濃一五・三河三・尾張一・近江一・伊勢一、計百八十。江戸が多いのは別として、奥羽・美濃・上野が『狂歌画像作者部類』につづいて多いのは、この地域に「五側」の勢力が強力に及んでおり、拠点となっている感がある。これは真顔側が全国に平均的に勢力を延ばしているのと対照的である。なお肖像は、北溪の他に北寿・窪俊満・五清らが

描いている。本書は文化十一年に書肆より再刊されている（同年の項参照）。

○十一月一日、遠藤春足に『雅言集覧』執筆に関して書簡を送る。

▲雅言集覧と申物出してと存候、これは多年見るに随ひ諸書より同語を抜き出置候。文章書き習ひ候人のために、益も可有之也。此節これを校正いたし羅在候（文化八年十一月一日付）。

□右は徳島の遠藤家蔵のものである。後年春足の尽力で紆余曲折を経て、『雅言集覧』が陽の目を見るのであるが、右の文面からいうと、すでに文化初年ごろより執筆にとりかかっていたことがわかる。また同書を古語の辞書ということだけではなく、文章を書く人のための「ことばの手引書」という性格を持たせていたこともわかる。なお『雅言集覧』については、以後注記は施さないが、拙稿「石川雅望『雅言集覧』の出版経緯について―慶元堂書記を中心に―」（『語文』第四十四輯、日本大学国文学会、昭和五十三年三月）を参看されたい。

※息子清澄、滑稽本『^{加古川本蔵}惡態之巻物忠臣蔵癡鑑』（二冊）を刊行する。

□本書は文化五年刊行の『長門本忠臣蔵』の改題本である。

○某月、狂歌を詠む。

▲文化辛未年 六樹園

新宿なるあそひともよしはらよりうつり来たれる傾城にむかひてか
しこはいかなる所そなととりとひける時かのうつりかへにかわ
りて

をりふしは問夫とねんねん二三月初会は桃李一片の春（小寺玉晃『連城亭隨筆』十二編之七）

□『六樹園狂歌集』には「吉原につとめたるあそびのいかなる故にか又新宿にて勤めんとて来りけるをこの女ども寄り集まりてそも吉原はいかなる処ぞ客をいかに扱ひたまひしなど問ふにうひうひしくやいらへもせでありければ」という詞書になって収録されている。

○奇々羅金鶏編『狂歌五百題集』（一冊）に序文を書く。

▲金鶏入道はかみつけの国の人なり。あざれ歌をば橘洲のぬしを師としてまなびたりき。いかなるころにか、自らふようのものにおもひて国々あまたへめぐらひて、ありかさだめずまどひありきけるが、四とせばかりさきに大江戸のはしつかたなるさんやと云へるところにて、やまひにかかりてなくなりぬとこそ聞しが、此五百題はさる料敵のあひだにかきあつめ置ける物となん。げに此道のうひ山ぶみにはます物なきしをりなめりとて、某のあるじことさらにとりあつかひて、かく木にゑりてふたつの巻とぞなしたる。此はしつくりおのれにあつらへつけよと、遺言しおきていといふをきけば、すまひいなまん詞もなく、せめて筆をはしらせつれど、あはれいつまでとうちこめかれつつ、よろづすすろにものうくて、かたはしをのみかきさしてとどめつ。

□金鶏は別号を燕石楼、東天紅盧という。通称畑道雲、名は秀竜という上野国七日市前田侯の医師であった。諸国を遊歴して江戸向島に閑居した。文化二年一月二十六日四十三歳で没した。

〔補遺〕

○天明六年春の項 『絵本江戸爵』所収の雅望の狂歌「引分のすまひをもちとなつけしハ腰のつよきをほめちきりてや」

○天明七年の項 竹杖為輕（万象亭）作の黄表紙『（面向）不背御年玉』（三卷・北尾紅翠齋門人式上亭柳郊画・寫重刊）に、雅望は登場している。この作品は唐から日本へ渡す面向不背の玉をめぐっての話であるが、河童が玉を探しに江戸へ出てきて泊ったところが、小伝馬町の旅人宿糠屋七兵衛（雅望のこと）であった。そして食事の場面の挿画に「亭主七兵衛」が描かれている。

○寛政十一年の項 浅草市人編『東遊』（葛飾北斎画）に詩を、五老の号で載せる。隅田川春雪の画に「浅草寺鐘舂軒聽隅田川雪垂涎看 五

老」とある。

○享和三年四月の項 頭光七回忌追善集『萩古枝』（浅草市人編）に「光雲かくれてよりはや七年になりぬ、また行あふほとをいつとかなとうちなけて」の詞書とともに「なき人をとふも卯月やいそのかみかつをさへきてはらわたをたつ」とある。

○文化元年三月 大田南畝の新居遷喬樓を訪問し、「さくら会」の一文を叙すか。

▲やよひの初のふつか、かけこひの責さいそく、今やおしよせきぬらんとおちあたるに、鶏の羽たたくにおどろきまどひて、からめてなる竹垣より通れ出て、人げなき大久保のわたりを落ゆく、挑灯だこの影を見るだに、かの者どもの追くるいやと胸さわぎぬ、此頃のはやり物とか、をぐるすの藪から棒なる、竹鐺のおそれなきにあらねばこハごハ足をはやめつるに、流れある所にいたりぬ、此あたりは、穴むなぎ江戸川の上にて、花嫁のたんす町もちかく、人のこのころのおくふかき、山の手の名ところなり、娘ここへとよびたてし、谷の戸出る鶯も、此みさかの名にぞ呼つけぬるとか、さるハほほほけきやうの声ハ、金剛寺の御堂にひびき、ひとくと告る湯屋蕎麦やさへ、かたみに軒をならべたり、そこに棟門のきらきらしきハ、はやうより我ものまねびして、今川庭訓とよみならひし、お師匠様のすみ所なりけり、折から軒ちかきさくらのひらきあひたる、さながらこしのしら山の、大きな湖を跡にのこして、ここに宿がへしつるにやと、とんだことさへおもひ出らぬ、かかるほどに、まがは定丸の両士、このさくさみんとてまゐれり、あるじ大によろこび給て、あはれ徳屋のかうやく、我軒に吸よせたりとて、とく盃とり出て、此せつ雛のもりこぼしならでハ、みさかなに何よけん、とりあへたる湯豆腐に、蕎麦よけんなどざれの給ふ、されど、かハラけみその最明寺殿にくらぶれば、こよなううるハしきまうけになん、おのおのつねならぬ酔ごちに、例のあだ

けたるすぢなど、うたひかハすべし、いでや三条の大みゆきとか、いせものがたりにしるしたる、百花亭のさかりなりしハ、よくもしらねど、あまづら入りしくちとりに、くくたちつつみ焼のみさかなにハ過さるべし、さる泣たふれの所せきあそびハ、したハしからず、かううちみだれやハラぎて、一ツ物くふまとひこそ、若後家の髪のたたまくをしけれといへば、あるじあみあみとわらひ給て、けふの半日のむしるをなづけて、朝野群載にいふめる、さくらえとや呼つてん、此会けふにかぎるべからず、花のなごりの跡とめて、何がしれがし社をむすびて、夏にまれ秋にまれ、桜に名ある上野の大師、輪番にあるじまうけすへしとの給ふ、いとよかんなりなど聞えはやす、かのかけこひおそるるかたる翁、よろほひつつさくら木のもとによりて、げにつれなき命のこの花のさかりにしもあへりける、時なるかな時なるかなとうちながめて、

さんりやうのしちにおきなバ質屋めもみたびやかがんはなのかのそで

これハいと人わろきことのはなるを、はらにあまれるため小便、つつみもあへずもらしつるかな、人やしらみのふる布子、とまれかくまれかいやりてん(『狂文吾婦那万俚』)。※右一首は『万代狂歌集』に収。

□南畝が三年ごしの懸案にしていた住宅を、小石川金剛寺の地内に年賦で購入したのは、享和三年十二月二十二日であった。新居は小石川から小日向に下る金剛寺坂に面し、御徒町の家とは違って閑静で、富士が眺望できるほど見晴らしがよく、鶯が多くそのためこの一帯は鶯谷とよばれていた。南畝はこの家を「遷喬楼」と名づけ、自からも「鶯谷吏隠」と別号を用いた。実際にこの家に移ったのは翌文化元年二月末であった。右の雅望の文が書かれたのは、南畝の移転直後とみたい。南畝はこの家を文化九年に引き払い駿河台に移っている。雅望

が三月に訪問できたのは、文化元・三・五・七・八年のいずれかであるうが(この年以外は、南畝は長崎や、玉川巡視などの公務出張をしている)、再度いうように雅望の文章から本年とみたいのである。南畝は新居で、しばしば「観桜会」を催している(本稿五ページ参照)。

○文化元年の項において「青木甚四郎」について不詳としたが、つぎの資料を得たので記す。南畝の『調布日記』に、

今夜の宿は古川村の里正与左衛門が宅にして、二月八日風はげしき日にやどりし所なり。夜にいりて川崎宿の里正青木甚四郎・亘田村にゆきて写し来れるとて縁起をしめす

とあり、玉川巡視中の南畝に「新田大明神」の縁起を写し持って来てくれたのである。すなわち青木は川崎宿の名主であった。また狂名を田毎守豊といい、浅草市人の「壺側」に属しており、市人編の『東遊』や『狂歌萩古枝』に入集している。また黒川春村(三世浅草庵)の『壺すみれ』にも「守豊 武蔵国□□郡川崎人、号浅雪庵」と記載されている。

(未完)

(追記) 本稿を成すに当たって、中村幸彦先生には御珍製の雅望自筆の資料借覧の御許可を、浜田義一郎先生には御垂教をそれぞれ賜った。またいつものごとく国立国会図書館、慶応義塾大学図書館、東京大学図書館、東京都立中央図書館、九州大学図書館、内閣文庫、青梅市立郷土博物館長稲葉松三郎氏にお世話になった。記して感謝するとともに、大方の御批正、御教示をお願いする次第である。

(昭和五十四年 六月 一日受理)

(昭和五十四年十二月十八日発行)

